

# 般若心経夢影録

## 序章

井上希道

### 一、般若心経は最も親しまれている経典

この般若心経ほど親しまれている経典は他にありません。それは内容が高邁こうまいにして簡潔かんけつな上に、ボリュームが丁度いいからです。お題目も加えて纒くるみに二七六文字です。早口で一分足らず。ゆっくり読んでも三分弱の小編ですから大変早くから親しまれ愛されてきました。

我が国に到来したのは、小野妹子おののいもこが入隋にゆうずいし持ち帰ったものが最初だと言われており、今それは法隆寺ほうりゆうじに納められているそうです。淳仁天皇じゆんにん（四十七代 733〜764）は勅令ちよくれいを発して国民にこれを読むよう勧めました。その文に曰く、

「聞くならく、摩訶般若波羅蜜多まかはんにやはらみったは是れ諸仏しよぶつの母なり。四句しくの偈等げとう、受持読誦じゆじどくじゆせば、福を得え、徳聚とくあつまること思慮しりよすべからずと。是れを以て、天子念ずるときは則ち兵革災害裏へようかくさいがいりに入らず。庶人念ずるときは則ち疾疫厲鬼しつやくれいき（悪病・疫病神）家中かちゆうに入らず。悪を断ち、祥さいわいを獲ること此れに過ぎたるはなし。宜しく天下諸国てんかしよこくに告げて、男女老少だんじよろうしよを論ずることなく、起坐行歩きざぎようほ、口口に閑しずかみなこと、摩訶般若波羅蜜多まかはんにやはらみったを念誦ねんじゆすべし。云々」

弘仁九年こうにん、天下に疫厲やくれいが蔓延まんえんして手の打ちようがなかった時、嵯峨天皇ささがは「国土安穩・天下泰平こくどあんのん てんかたいへい・万民快樂ばんみんけらく」を祈り、三拝されては一字をお書きになったそうです。後光厳天皇ごこうごん、後花園天皇ごはなぞの、後奈良天皇ごなら、正親町天皇おおぎまち、光格天皇こうかくもこの美麗びれいに倣ならってお書きになられたものが各々国宝として、嵯峨の大覚寺さ が だいかくじの心経殿しんぎやうでんという宝庫きんのうに謹納きんのうしてあるそうです。

### 二、般若心経について

この般若心経について少し触れておきます。正式名は「摩訶般若波羅蜜多心経まかはんにやはらみったしんぎやう」です。略して「般若心経」又「心経」とも言います。広本と略本とがあり、広本は六百巻という途方もない

物です。序文と正宗分しょうしゅうぶんと流通分りゅうつぶんの三部さんぶになっていて、序文は、謂いわれや因縁を述べてあり、正宗分で内容極意を説き、流通分は、これを世界に広めて無明から救うための手立てを説いたものです。

略本は正宗分のみです。小野妹子が持ち帰ったのは是れです。漢訳されたものは八通りあると言われていますが、最初に漢訳したのが鳩摩羅什くもらじゆ（三四四〜四一三）で、この訳が基になっているようです。

この方はとてつもない方で羅什三蔵らじゆさんぞうとも称せられています。三蔵とは聖典に精通した偉大な仏教学者に対する尊称です。西暦四〇一年に長安ちやうあんの都に招かれ、そこで没するまでの十三年間を翻訳作業ほんやくさぎやうに没頭された方です。今から凡そ千六百年前です。彼によって中国仏教が画期的に発展し、思想を始め多方面に多大な影響を与えました。弟子三千人居たと言われています。

それから凡そ二百五十年後、太宗皇帝たいそうこうていの勅詔ちやくしやうによつて、かの玄奘三蔵げんじやうさんぞう（六〇二〜六六四）がインドへ逝いき、大般若經だいほんにやぎきやう六百卷をはじめ多くの仏典を持ち帰り翻訳されました。これから以後のものを新訳本と言ひ、それまでのものを旧訳本と呼んでいます。

彼がインドへ赴おもむく時、この「心経」を携えていったため無事を得たとして、この經典に大功徳有りと言われたのが始まりのようです。

### 三、玄奘翻訳の定款

余談ですが、我が朝の聖徳太子しょうとくたいしは（五七四〜六二二）玄奘三蔵より二八才年上でした。小野妹子の時は、ですから旧訳本しか無かつたのです。現在は殆ど新訳本が遣われています。その理由は梵語ほんごの原典に限りなく忠実だからです。玄奘三蔵が翻訳するに当たり独自の定款ていかんを立てました。次の五項目に該当するものは漢訳しないというものです。

- 一つ、たくさんの意味を含んでいるもの。
- 二つ、非常に秘密的な言葉。
- 三つ、彼の国にあつてこの国に無いもの。
- 四つ、古えのもの。

五つ、梵語音そのままの方が功德があるもの。

例えば最初の「摩訶」ですが梵語で「マハー」。「大」と「多」と「勝」の意味がある言葉とされています。今日的にいうならば、空間的時間的に無限。物質的にも精神的にも、具体的にも抽象的にも無限を意味します。

釈尊は心身、自他、大小、凡聖、生死、善悪等、一切を超越されていて、而も全てを包含しているため、該当する漢字が無く、訳すことが出来なかったのです。ですから梵語の音律「マハー」を「摩訶」字に当てたのです。同じく「般若」も「波羅密多」も最後の。「羯諦羯諦。波羅羯諦。波羅僧羯諦。」も無訳です。従ってこの漢字を幾ら解析しても意味はありません。

#### 四、玄奘三蔵の真意

文字を解析し概念的、哲学的に解釈して般若心経を理解し体得したとなると、釈尊の真意を誤ってしまいます。是の危険を回避するために安易に文字変換せず、人々宜しく研鑽して自ら体得しなさい、というのが玄奘三蔵の心意気です。何より釈尊に忠実でありたかつたからです。

意味のない漢字を殊更に当てたのは、杯で大海を測ろうとする愚や、筒を覗いて大空を見た積りに成ったりするような過ちを救うためでした。こうして釈尊の真意を忠実に伝えるために訳さなかつた玄奘三蔵の真心に感謝すると共に、この廣大慈恩の涙を私たちは忘れてはならないのです。

では翻訳をしない部分はどうか。当然真意は何であろうかと自ら大疑団を起こして追究し自得するしかありません。

ここで二手に分かれることとなります。知ろうとして語句に執着して道理に落ちる人と、真に行じて体得しようとする人です。つまり自己の分別を立てて語句や言葉を理解していく人と、それらを捨てていく人とに分かれるのです。

真意を体得するには、文字や語句を離れ、素直に釈尊の指示の通りを実地に行ずることです。これが仏道修行であり釈尊の意志に従うことです。即ち、この般若心経の通りを行えば良いと言ふことです。修行純熟して徹し切った時、是の心身が無くなり法と一致するのです。その瞬間に全ての真相がはつきりするからです。言句は死物です。

全ての経典がそうであるように、この般若心経も読んで法理を理解するのではなく、釈尊の意志の通りを行じて初めて真意に到達することが出来るのです。要するに昼夜を分かたず、「行深般若波羅密多」です。徹底即今底を行じなさいと言ふことです。本真剣に「今」「只」することです。

#### 五、舍利子について

この心経は觀自在菩薩が説いた文脈で始まり、内容は実地の修行法方を説いたものです。相手は舍利子しやりしを初め生粹きんすいの十大弟子に重きを置いての説法です。既に彼等は一隻眼（心眼・空）を得ており、いよいよ真空妙有の大悟に到るべく導かれたのがこの般若心経です。特に舍利子の境界は良く、後一步という処からして、釈尊は特に期待していた様子が伺えます。

智恵第一と言われた舍利子が八歳の時、インドのマカダ国を旅して或る城下に入りました。年に一度、国王ご臨席の下で大議論を展開する恒例行事にたまたま出会った時のことです。

高座に席四つが設けられていました。一つは国王、一つは太子、他の二つは議論問答する二人のためだと聞いて、彼は泰然とその回答者の座に着きました。

国王大衆共に余興のつもりで彼と問答をさせたのですが誰も勝てず、遂に大論師の御出ましと

なり大議論を展開したのです。国王大臣、そして一般市民の前で見事な答弁を以て全戦全勝を果たしたのです。

特に驚嘆した国王は、彼をインド中智恵第一と称し、領地まで与えて学問の指導に当たらせました。舍利子はそれ程の頭脳でした。

当初バラモンでしたが、歳十六才の時、真剣にしているが、自己を忘れたことがあり、既に空の様子を知っていたのです。

或る時、馬勝めしやうと言う釈尊の弟子に遭遇して、釈尊の法を聞くや忽ち理解し帰依しました。是れが法縁となり舍利子の人生を大きく開くことになったのです。

既に一隻眼を具し百人の弟子を持つ実力者でしたから、釈尊の深淵なる法の素晴らしさを見て取ることが出来たのです。生まれながら大善知識の資質を具していたのです。

この時、友人である神通力第一人者の目連尊者もくれんそんじやも百人の弟子を持っていました。共に信頼し合う道友だったので、舍利子を信じてそれぞれ百人の弟子を伴い釈尊の門を叩いたのです。

天才釈尊も舍利子の頭脳明晰さには舌を巻きました。彼を称して、「舍利子の智恵は、インド中の知恵を全て集めても彼の十六分の一に過ぎないだろう。」と賞賛しています。

飛び抜けた知力・徳力・指導力・説得力・統率力を具備した人でしたから、忽ち教団の信望を得ることとなり、彼が補佐してより教壇は急速に飛躍したのです。当然ながら大法体得の期待も大きく、大法成就は釈尊が一番望んでいたことでした。ところが釈尊の肯す底ゆるの境地を得ること無く、無念にして師匠より速く亡くなりました。

この「心経」はあたかも舍利子一人に説くように、良く聞けよ、と言わんばかりの語りかけで説法されています。本当に一箇半箇です。一人でも伝わったら大安心だからです。

今は我らが舍利子となる時です。釈尊は今、我らに向かってこの絶妙の法を説かれるのです。聞かずんば有るべからず。思えば実に尊いこと限り無しです。いきなり釈尊の暖皮肉に出会えるのですから。ここで直ちに感応道交し、不疑ふぎの境界に至れば即祖師です。

## 六、經典の真髄は何か

ところでこの般若心経を初め、全ての經典の真髄は何を説いてあるのか。誰もが知りたいところです。勿論「真理」であり「心」を説いたものです。どの經典もそうです。別名「法」とも「道」とも言います。その真相は「空」と言うことです。

我々を含めた天地自然には山川草木があり、雪月花がある。春夏秋冬があり東西南北がある。出来たり壊れたり、燃えたり流れたり、葉もあれば毒もあるし、水を掛ければ火は消える。

我々には心身があり、眼耳鼻舌身意があり、色声香味触法があり、生老病死があり、喜怒哀楽がある。これらも宇宙の様子であり「空」の働きです。

食欲に任せて思い切り食べれば満腹になり、次にはもう欲しくないと拒絶したりする。愛した

り信頼したり、裏切ったり騙したり、与えたり奪ったり、助けたり殺したりし、平和を望んだり大量殺戮を考えたりする。

是れを因縁所生の法と言うのです。因縁所生の法とは、因、縁、果のことです。一口に因果とか因縁と言われています。無限にあるこうした縁は、全て正体が無いので、縁次第でどのようでも関わるから、先程のように何でも起こるし、縁が尽きれば全て終わっていくのです。ですが、縁さえあれば又同じ事が発生するのです。是れを因果流転と呼んでいます。縁に拠って起こるので「因縁生起」と言うのです。

経典はこの因縁所生の法を説き、実体が無いことを延々と説いておいて、一番大切なことは、我々の心身も人生も、やはり縁の者で「今」仮にこのように「只」在るに過ぎないのだ。だから菩提心を起こしてその実体のないことを悟りなさい。解脱しなさい。急ぎなさい。人生は短いぞ。本来「皆空」であることを悟れば、不生、不滅の法が我が世界となり、生死を透脱して大安心となる、と説いているのです。

## 七、空とは何か

「空」とは宇宙その物です。宇宙と言えば絶対無限を意味し、且つ一切を言います。勿論その大きさも深さも量も、時間的にも空間的にも、最大も最小も、何もかも測り知れないから宇宙と言いつても無限と言うのです。要するに、時により、処により、人及び物が関係し関わることであり、又その関わりが終わったりすることです。その物に実体が無いから縁に拠って何にでも成るが、「只」縁のもの故、全て仮の姿なのです。

しかし「今」仮だとしてもそれが事実です。是れが「空」です。有りながら無いと言うことです。

あたかも鏡の如くです。何でも縁に遇えば鏡中に現れるが実体は何も無いのです。全て縁の様子ですから、縁以外に何も無いのです。「空」である証拠です。この事を体得するのが仏道修行です。

植物に例えるならば、種が因です。それぞれの種にはその物固有の過去世があり、又情報があり未来を産み出す因縁を携えています。だが種だけでは何も発生しません。ただ種のままです。しかし大地に落ちると、この大地が縁となり、やがて芽も根も生えて、時節を得ると花咲きみだれ、遂には結実する。是れが因縁果の果です。この果が次の因となるのです。

全てそれぞれが因果であり縁ですから、縁と縁が関われば必ずその結果が在るのです。こうして連綿と流転するのです。是の計り知れない様子が宇宙であり、我々が携わる日常であり人生なのです。ですから是の因縁所生の法に漏れる物は何一つ無いし、全体流転していますから、全て仮に、今、このように「只」在るだけです。是れを「空」と言い因縁所生の法と言うのです。

宇宙の真理であるこの法、つまり「空」を体得すれば、一切の苦厄が霜露の如く消滅して大安樂を得るぞとの教えが、即ちこの般若心経です。内容に入れば事の子細が分かります。

## 八、釈尊は如何にして空を伝えたか

釈尊は解脱するための道を説かれた御生涯でした。解脱が完全なる救いだからです。では、どのようにして「空」を体得させようとしたかです。それが是の般若心経に凝縮されているのです。特に「行深般若波羅密多」を徹底しなさいと言うことです。

要するに日々即今底を錬ることで、修行が純熟して時節が到来し「時照見五蘊皆空。度一切苦厄」の覺証をもたらす。だからこれを実行し体得させようとしたのです。

あれほどの法を解き尽くしておきながら、死を前にして一字不説と言われました。正法眼蔵

涅槃妙心ねはんみょうしんは、教外別伝きょうげべつでんであり、以心伝心いしんでんしん。つまり言葉や語句では伝えられないため、自ら行じて自得するしかないぞと。

つまり、自分が説いた法門は全て月を示す指でしかなく、示した通り実行しなさいと言うのが「行深般若波羅蜜多」です。

説かれた全ての法門は、法を得るための方向付けであり、信を深め、着眼を定めるためです。法は口でも文字でも説くことが出来ますが、法を伝えることは出来ません。つまり、人の説明などでは自分の心を究めることは出来ないと言うことです。

何故でしょうか。

言葉や文字上の法は知性によって処理されます。何処までも自分の考えに基づくものですから、どうしても分かる、分からないに拘り是非の念も好き嫌いの感情も介入してしまいます。謂わば言葉や書物で得た法は、何処までも個人の意識で設えた理屈の法に過ぎないのです。

そこで積尊は迷いの元である意識を離れること。即ち禪定を錬ることを仏道修行の根本としたのです。

知的計らい一切から離れて、無分別になつて素直に行ずる。つまり余念無く即今底をひたすら行ずること。一つに成つて我れを忘れ切ることです。

徹した時が「空」の体得だからです。

この般若心経はそのための大切な実践方法なのです。語句の意味を如何に理解しても意味が無いと言うことです。

自転車でも自動車でも、その部品や構造を詳細に理解しても決して乗れないし運転できないのと同じです。実地に行ずる以外には真髓を会得する道は無いのです。

## 九、一華五葉を開く

人類にとつて最も幸いしたのは釈尊の出現であり、人類が根底より救われる道、即ち解脱の法門が開かれたことでした。更なる幸いは、靈鷲山りょうじゆせんに於いて世尊捨華せそんねんげ、迦葉破顔微笑かしょうはがんみしよくの一大事因縁により第一祖が誕生したことです。

靈鷲山は初めて仏法が伝統した世界一神聖な御山なのです。迦葉尊者が解脱したと言うことは、徹底即今底を練つたと言うことであり、やれば誰もが体得出来るという途轍もない証明者第一号なのです。

「空」の真相、解脱の消息はこうして迦葉尊者が伝統してより、嫡々相承てきてきそうじようし第二十八祖達磨大師だるまに正伝しました。

達磨大師は師の命により、遂に支那の廣州に東来されたのです。そして凡そ三百年の後、正法一華五葉を開き、五家七宗が開花していったのです。

五家とは、曹洞・雲門・法眼（石頭系）臨済と漣仰・（馬大師系）を言い、更に臨済系は宋代に入るや、黄龍派と楊岐派が生まれ、合わせて五家七宗と言うのです。

加えて、曹洞宗に西天の二七、東土の二三と言う語句があります。西天とはインドです。二七代まで正法が伝承しましたが、第二十八代の達磨大師が支那に來られて以後、印度には正法は断絶してしまいました。

そして東土の初祖、達磨大師より道元禪師までが二三代です。道元禪師は正嫡第五一祖にして日本曹洞宗の開祖です。

インドから支那、そして遂に我が朝へ正傳の仏法が伝統したのです。これを仏法東漸と言います。今より凡そ七百年前のことです。東漸して百年後、渡來僧もさることながら多くの祖師が誕生して鎌倉五山、京都五山と開花して、日本に正法が流通していきました。

何れの祖師方も命懸けで般若波羅密多、即ち即今底を行じて解脱された英傑です。祖師方を大善知識とも言います。

烏澁がましくもここに山僧が一样を呈するのは、この般若心経は解脱への道、即ち仏道修行の大指南書である点を際だたせて、釈尊の正法と慈悲を伝えんが為です。最も端的にして究極の道が説かれているので、この通りに日々努力すれば必ず時節が訪れ、結果が現れると言うことを伝えたいのです。

今、釈尊は我等に「心身脱落の急所はここだぞ！」と渾身の熱誠を注いでいるのです。我等、即今、能く聞き、能く学び、深く行じて迦葉尊者の復活なるべしかと。これ無上の報恩底ならん。参。

井上希道 曰

摩訶般若波羅蜜多心經

觀自在菩薩。行深般若波羅蜜多時。  
照見五蘊皆空。度一切苦厄。舍利子。  
色不異空。空不異色。色即是空。  
空即是色。受想行識。亦復如是。  
舍利子。是諸法空相。不生不滅。  
不垢不淨。不增不減。是故空中。  
無色無受想行識。無眼耳鼻舌身意。  
無色声香味觸法。無眼界乃至無意識界。  
無無明。亦無無明盡。乃至無老死。  
亦無老死盡。無苦集滅道。無智亦無得。  
。以無所得故。菩提薩埵。  
。依般若波羅蜜多故。  
。心無罣礙。無罣礙故。無有恐怖。  
。遠離一切。顛倒夢想。究竟涅槃。  
。三世諸佛。依般若波羅蜜多。  
。故得阿耨多羅三藐三菩提。  
。故知般若波羅蜜多。是大神呪。  
。是大明呪。是無上呪。是無等等呪。  
。能除一切苦。真實不虛。



故説般若波羅蜜多呪。

即説呪曰。

羯諦羯諦。波羅羯諦。

波羅僧羯諦。

菩提薩婆訶。般若心經。

## 摩訶般若波羅蜜多心經提唱

### 「摩訶」

まずはお題目の「摩訶」ですが、字義は既に序文で説いた通りで、「大」「多」「勝」の三義があり、比べる相手が無いこと。唯一絶大の意です。唯一とは一心です。大自在力です。徹底です。徹底する時、自己は無いのです。自己無き時、自己成らざる無し。つまり自己無きを「摩訶」と言うのです。自己が無いほど大きくて強い者はないのです。

勉強や仕事に徹底した時、三・四時間があつと言う間に過ぎていた経験は誰にも有ったはずです。この時、仕事も勉強も、している事も自己も忘れていて、「只」仕事だけ、勉強だけです。時間も空間も是の心身も何もかも忘れて無くなっていたのです。その時、その事に成り切っていたからです。だから妨げるものも、余物が入り込む隙も無かったです。唯一にして純粹、徹底。「今」に成っていて自己を超越していたのです。更に徹底し切るまで何日も没頭していたならば、自己を忘じ切り解脱していたのです。悟っていたのです。「摩訶」を体得できたのです。

ところが菩提心がない限り大切な経験は一切活かされず、直ぐに普段に還り、折角の悟りへの道を捨て、惑乱・葛藤の凡夫に落ちるのです。即ち、過去を振り返り、結果を取り上げて云々する癖が有るため徹底し切ることが出来ないのです。是の悪い癖を自己とも言うのです。目が覚める前に又眠って夢を見続けているのと同じです。実に悲しい癖です。

この悪弊を仏が哀れみ、早く眼を醒ませと是の「般若心経」を説かれたのです。自己が有る限り他との衝突は免れないし、内においても惑乱・葛藤から逃れることは出来ないのです。それで本来の「摩訶」に目覚めるべく坐禅修行がどうしても必要なのです。

俱胝和尚は何を聞かれても生涯一指を立てて済ませた異色の禅師です。不在中、求道者が現れて法を尋ねた時、弟子の小僧が師匠を真似て、ヌツと一指を立てたのです。それを知った俱胝は、小僧の指を刎ねました。小僧は激痛のあまり走り狂いました。俱胝は「小僧！」と大声したと同時に一指を立てたのです。それを見た小僧は咄嗟に指を立てようとしたが無かった。是の瞬間、忽然と自己を忘れて大悟したのです。徹底したのです。

俱胝禅師に人権意識や世間があり、恥があり、責任感があり、危機感や痛さを慮る心が有ったから、人の指を切断することなど到底出来なかつたことです。自己が無かつたから自在に出来たのです。自己が無い是の心、是の働き、是の自由さを「摩訶」と言うのです。雪竇禅師は是の越格の力量を「道まさに高し」と誉めました。祖師を育てたからだけではありません。本当に自己を尽くし切り、「摩訶」に到り得ていたからです。

命を捨てて求法していた小僧は、痛さ以上に無限の宝を得て心から歓喜したに違いない。と同時に、師匠に生涯限りなく感謝報恩した筈です。世念を捨て尽くし、摩訶自在、悠々自適の大生涯を思うべしです。

「摩訶」の俱胝ですから、指も「摩訶」です。死に臨んで大衆に曰く、「我れ天龍より一指頭の禅を得て一生受用不尽。会せんと要すや？」と言いつつ一指を立て、身を指頭に隠して去りました。無論生死をも超越した「摩訶の指」ですから使い切れるはずはありませんし、指に実体が無いので俱胝だけのものではないのです。「只」一指を立てる時、即俱胝の再来です。「摩訶」を体得するには、心血を注いで「今」に徹すべく努力あるのみです。

## 「般若」

「般若」は仏智です。自己の無い心の働きです。個人的な意見や見方ではなく、何も無い処から出る知恵です。

一個のパンを百人でも千人でも自然に分かち合つて食べることが出来る、途方もなく純粹で豊かな智慧が「般若の智慧」です。救いです。そのためには何が必要なかということ、徹底思いやる心、即ち慈悲です。諦めも妥協も自由にする力。即ち拘りも何も無い「只」の心です。それは自己を徹底捨て尽くし空っぽの心でなければ現れない智慧です。これが「般若の智慧」です。

徳山の弟子に雪峰、雪峰の弟子に玄沙が顕れ、門風大いに栄えました。皆天下の英傑です。玄沙が師匠の元へ三枚の白紙の手紙を送つたら、さすが雪峰です。是れを、「君子は千里同風」と読んで祖師方を喜ばせました。矢張りお前もか。安心安心と。玄沙は師匠に「只」送り、雪峰は「只」見たのです。「只」ほど大きい智慧はないのです。到り得た者同士は以心伝心、一心同体です。何も書いてなくてもお見通しなのです。時間空間、文字語句など関係無い心が「般若の智慧」です。

赤ちゃんは何事もなければスヤスヤ眠りますが、空腹になつたり異常がある時は「只」泣いて知らせます。泣き止まぬと殺すぞ、と脅しても「只」には関係無いのです。意識的な要求でも個人的な欲望でもありません。縁のままです。無分別の智慧です。無為、無策、自然のままの智慧は何者にも妨げられないのです。自己が無いとはそう言うことであり是れが「摩訶」です。

徹すれば自己が落ちて身心一如になります。この一刹那の大自然が解脱です。赤心の無分別智に還つた瞬間です。この時から開けて輝く智慧が「般若」であり仏智です。これが釈尊の心であり諸仏祖師方の心です。「君子は千里同風」です。捨て尽くし、徹し尽くして白紙になり「只」に成ることが般若心経の主眼です。

「般若」を実相般若、観照般若、文字般若等三つ乃至五つに説明したりしますが、今は分析に用は無いのです。実地に修行する人は須く語を離れ道理を捨て、専ら行じて徹することです。徹し得たのが次ぎの「波羅蜜多」です。

## 「波羅蜜多」

到彼岸と訳するのが一般です。迷いがあるから救いがある。このように迷いを前提にすれば、当然悟りへ向かうことになり相対的に説くことと成るのです。それで此方の岸より彼の岸に到る、となる訳です。一見分かりやすい道理ですが、是れには落とし穴があるので注意が必要です。

何にが迷いかです。

極日常のことです。食べる時は確かに食べるしかないので。更に厳密に言えば、箸を持つ時は箸を持つことしか無く、摘む時はそれしか無い。口に運び、一噛み一噛みする。祖師方も我々も全く同じなのです。是れが食事と一口に言っている様子です。箸を持つ「今」。摘む「今」。運ぶ「今」。こうして時が異なり作用が異なり、そして事が異なっています。徹底「今」しかないということです。是の一点に能く注意して下さい。

「今」に実体が無く、縁も実体が無いので束縛している物は何も無いのです。ですから自由に如何様にも行為することが出来るし、全て事実であり、別に迷いでも悟りでも無いのです。「今」既にその事が成就しているのです。迷いの食べ方、救いの食べ方などないのです。常に「今」、その一事実があるだけで、この岸もあの岸も無いのです。

古人曰く、迷則此岸まよえばこのきし。悟則彼岸さとればがん。迷悟共亡とらわれなければ。離彼此岸そのまねはんと。ですから適訳は「事究竟じきゆうぐ」です。即今このまま、事がちゃんと成っていると言うことです。何時も縁その物であり、常にその物なのです。常に有るべき様に「今」「只」有るだけです。それで「波羅蜜多」を「事究竟じきゆうぐ」と言うのです。

是の事がはつきりするか、しないかだけです。此処が禅の独壇場です。はつきりした時が「波羅蜜多」です。

ではどのようにすればこの境界を得ることが出来るか。既に「波羅蜜多」ですから、成ろう、至ろう、得ようと思わないことです。思うだけ、到ろうとするだけ煩惱なので徹することができないのです。

「今」が既に「波羅蜜多」ですから、その事に気が付けばよいのです。気が付かないのは邪魔物が有るからです。邪魔物とは自己です。身と心との隔たりです。本の身心一如に還りさえすればよいのです。身心一如に目覚めるために「今」に成り切り成り切りの努力を続けることです。「今」その事だけに一心不乱に成っていれば徹底する時節が訪れ、是の心身が融合して「隔たり」が融け落ちるのです。この刹那に従来の業障が破れ、本当に夢から覚めるのです。一大事因縁、解脱の到来です。

もし「即今底」以外に向かって努力すると、それが迷い道となり方向が逸れてしまいます。

菩提心の強い修行者がいました。未だ證契を得ず、時の悶々と過ぎ去るを悔いていた或る日、

錫杖しやくじょうを手に、笠をかぶったただならぬ修行者がヌツと現れたのです。名は實際じつさい。巖頭の鉗がんとう錘けんついを受けた強者の尼僧です。巖頭の弟弟子にはあの雪峰がいますから、相当鍛えられているはずです。実際はそのままだを三周してスックと立ちました。自己無く、僧無く、禪堂無く、「只」法有るのみ。狼狽えた僧は禪堂の神聖さを重んじたつもりで、「笠を取っては」と。精一杯の挨拶です。

實際曰く。「道得いじえば即ちとらん。道得いじえずんば即ち去る。」本当の修行者なら祖師が小踊りして喜ぶような挨拶をしない。さもなくば立ち寄る意味もない故、ワシは去るぞ。僧無対。實際立ち去らんとしたら、「もう日が暮れるから、今夜は宿まっではどうか。」と親切を尽くした。

實際曰く、「道得いじえずんば宿まらじ。」では、仏法の何たるかを言え。言えないなら宿まらぬ。僧遂に対する無し。實際忽ち去りました。自由自在、何者も侵すことが出来ぬ境地は天晴れです。自己を忘じたほど強くて大きい者は無いのです。天地を身と為し、虚空を心と為す。到り得た境界はの如し。將に摩訶般若です。

僧大いに憤慨して思えらく、「我れ丈夫の形を処すと雖も、丈夫の氣息無し。明日庵を捨て遍参せん。」と。その夜、大善知識の来たるを夢に告げられた。数日を経ずして天龍が現れ、即ち丁重に迎えて涙ながらに實際との始終を訴える因み、やおら天龍は「只」一指を立てた。

時節因縁なるかな。この時、修行純熟した。僧、見たまま徹底して自己を忘じ大悟したのです。大歡喜を思うべし、尊ぶべし。確かに一指は一指にして一切の疑団が解け、實際が伝えようとした摩訶般若、大慈大悲に證契したのです。天龍老師に対しては元より、香を焚いて涙ながらに実

際に礼拝したことであろう。

是の僧こそ、小僧の指を刎ねたあの俱胝禪師です。是の処知しよちを忘じた一刹那の体験が「摩訶」であり「波羅蜜多」なのです。到と未到の差、是の如し。

## 「心」

カリダと言う梵語をこの「心」の字に当てたのです。それには理由があるのです。カリダは草などの芯を指し、全ての中心を意味しています。あらゆる物に中心があるということです。

では人間の中心は何か。

「心」です。

では心の中心、精神の中心は何か。

真実なる心、自我・我見の無い、本来の心です。

ところが「心」ほど掴み所のない者はないのです。捕らえることも固定することも離れることも出来ない霊体です。しかも怒ったり悲しんだり、信じたり裏切ったりして留まることのない魔訶不思議な働きをする、将に霊体です。そう簡単にその真相を体得出来る代物ではないのです。何故かという、実体が無いからです。

無い者をどうやって体得するかが一大事因縁なのです。

長い余談になりますが、少し「心」を砕いて説明します。

## 【普段の心】

普通能くあることですが、昔の嫌なことを思い出すと、意志や願いや気持ちとは関係なく、即その時の嫌な感情が現れます。普段私たちの頭の中は、今まで得た情報がたつぷりと集積していますが、精神の成り立ちは遺伝性は勿論、経験や環境や努力に大きく影響されています。特に両親と家庭環境、そして人間関係は人生を決定づける要因とも成っています。

これらの情報が或る縁に遇うと、忽ち概念となり言葉となりイメージとなって心の全域に影響し、更に喜怒哀楽、怨念憎しみなどの感情が発動するのです。

言うなれば常に即応体制にあるため、一瞬にして一機に複雑連鎖し多重角化するのです。ボリウムに於いても速度に於いても、知性や意志の力では到底コントロールできる相手ではないのです。この連鎖する癖が固定化し構造化しているから始末が悪いのです。是れが自己、自我と言われている癖です。

だから忽ち平常心を失い惑乱・葛藤するのです。これが日常の様子ですから心の安まるはずがないのです。一体我々の精神作用は如何なる要素で成り立っているのか紐解いてみましょう。

## 【知性・感性・意志の三要素】

### 一、知性

精神作用は大きく分けると知性と感性と意志の三つです。これらは常に顕れているのではなく、或る時、或る縁に遇うと忽然と顕れる不可思議、不可商量の霊体です。何れも人として重要なもので、どれ一つ欠けても重大な異常をきたすものです。

知性は人間の最も顕著な特性で、その個人差は限りなく大きいものです。しかし知性は大きければ良い、という簡単なものではありません。悪人の知性は悪に遣われるし、より高性能であれば

ば更なる悪を作すからです。

悲しいかな知性自体には人格や社会性、又徳性などの働きは皆無なのです。若しそれらが有るのであれば、知性が高いほど人格性も高いはずです。無いから問題なのです。

つまり知性は要求のままに、主の命ずるままに情報処理をする単なるコンピュータに過ぎません。確かに頭の良い方が何かに付けて便利だし有利です。しかし知性自体には反省機能も思い遣りも、そして倫理観も信念も無い代物ですから、知性を絶対視することは大変危険なのです。幾ら知性が高くて、魂と言われている道義や信義、誠意や情味や責任感が無ければ人間らしい人間とは言えないし、知性が高い人だから煩惱が無いなどと誰も思っては居ないはずです。

特に日本民族が幸いしたのは、早くから大勢の祖師方を得たことです。祖師方はこの知性と次ぎに説く感性の危険性を熟知していて、それを自己調御するための心得を、日常の信条として教えてくれたことです。日本人の宗教観は特別視したのではなく、生活信条そのものが既に宗教

性の高いものだったのです。修善奉行、よいことをおこなない 諸悪莫作。ちいさな悪くもするな 仏教の道德観はこの簡潔な言葉で纏めら

れており、加えて、己に克ちて礼を履むと言う儒教の仁の精神を、親が代々住職や儒学者より学び、それを子供の成長に伴って色々に説いて聞かせて人格の亀鑑にしたのです。時に宗教的、時に道徳的、人間的、特に常識として浸透させたため、今日の日本人固有の民族性と成ったのです。どんな自然災害が起きても決して略奪行為が無いのは一人々々の人格性が高いからであり、聖徳太子から始まった人徳教育のお陰なのです。

知性の大切さ、勉学の尊さを説きながら、その上位に「美しい心・徳力」に重きを置いた生き方を勧めて、日本民族の基本精神、即ち信条を育てた功績は実に大きいのです。何だか危なげな政治であり経済的にも危機感を感じる状況でありながら、国民の意識が安定しているのは天皇の存在と共に、美しい生活信条が健全な国家観を形成しているからです。今日はそれが次第に退廃してきたことは誠に悲しく恐ろしいことです。

## 二、感性

その信条を為すのが感性です。感性は感情、又情操など色々な言われているもので、所謂「気持ち」です。これこそ人としての大切な要素です。この情操が無かったら生きていく価値はないのです。理性と呼ばれるのは、知性に道義・信義が裏打ちされた時を言うのです。是の感性や情味が人としての潤いや安らぎ、喜びや種々の心情をもたらし、これが有るから生が尊くなり執着するのです。

若し是の情が無かったら味気なくて、生きようが死のうがどうと言うことはないし、生きていく味わいも潤いも実感も何も無いのです。ですから情が無かったら家庭も家族も夫婦も友人も、畢竟社会も成り立たないし、人類は絶滅しているのです。

何故なら、情愛が無ければ男女が結ばれないし、慈愛が無ければ赤ちゃんを可愛いと感じませんから育児が出来ないために絶滅するのです。

何が知性と本質的に異なるかと言えば、感情はエネルギーと直結していることです。つまり感情は身体と一体であり生命力と連結していることです。愛情とはエネルギーであり生命力です。本当に愛すればこそ本当に叱ることが出来るし、本当に護るし、本当に教えるので人が育つのです。愛が無くなるとは、そのエネルギーが無くなることです。欲望も怒りもエネルギーなので、その働き方によっては実に面倒なことに成るのです。

無くしてはならない大切な要素ですが、愛の裏切りに対しては殺人まで起こしてしまうほどのエネルギーですから、実に恐い両刃の剣なのです。怒り心頭に発すると、もはやそれは感情と言う精神作用に留まらず、現実に肉体现象化して、時に衝動的に行為してしまいます。エネルギーの暴走であり、取り返しの付かない事態にも成るのはこのためです。エネルギーの暴走は生存本能に基づくもので、自己保存のための攻撃力であり残忍性であり、須く暴挙です。

一方、大切な人や国家のために身を賭して護る力でもあるのです。この情が有るから種が恒久的に存在するし、又戦争も殺戮も無くならないのです。世界を騒然とさせるのは是の情なのです。極限状態に於いては自分もしくは大切な者を護ろうとすれば、相手を倒すしかないので。

殿中松の廊下の歴史的大事件は是の類です。国を失い大勢が死ぬことになりました。だが、同じく怒り心頭に発した真壁の平四郎は祖師になりました。怒りのエネルギーを菩提心に高次化したからです。感情はこのように生命力と直結しているということです。同じエネルギーですが、それを如何に健全に活かすかが大課題なのです。

古来より宗教家や哲学者や思想家が、高邁な論理を駆使して精緻に道なるものを説いています。根本は行為行動を如何にコントロールするかと言うことに尽きるのです。つまり、動物的生命エネルギーのコントロール法であり活用法なのです。

美しい心とは、正直で素直である上に、美しい概念と美しい思考系が作用して常に反省する心です。それには優しく暖かい気持ちで豊に育っていなければなりません。家庭を基盤として育まれる魂は魂に由ってしか培われず、而も貧道に於いて本当に育つのです。現代は貧や苦を避けようとするのが一般です。しかしそれを克服しようとする気持ちが大切であり、幸せを実感して生きるには是の気持ちは無くしてはならないのです。強い心とは意志が強いと思いがちですが、意志以前に心の方向付けをするのは気持ちなのです。信念です。美しい心の人は、いざという時、別人のように強くなるのはその為です。

### 三、意志

意志は知性や感情や行為を、公私の目的の為に程よくコントロールする大事な機能です。この機能が健全で強力、且つ継続性が高い場合、最も効率が良く快適に仕事も勉強も出来るのです。健全な志の元に、同士と共に意志の共有を図り、常に率先垂範出来る人は、必要とされる立派なリーダーです。

逆に自己中心に働いた場合、我見に拠って絶えず他と衝突して問題を起こす、即ちトラブルメーカーとなり、みんなから疎んぜられ嫌われ者となるのです。意志は感性を活性化して知性の悪しき思考を健全にコントロールしたり、又サイエンスの道理に従って、知性や感情の暴走を阻止したりする究めて大切な機能です。最低限、常に全体の安全と平安、そして公益性を護ることが主眼ですから、自己主張以前に、大前提を信念にした意志が必要なのです。つまり信念となっている信仰心さえもコントロールするのが本当の意志なのです。

国際的に能く見る光景ですが、他国で生活する場合、自民族を意識するのは良しとしても、その国の歴史や文化伝統、教育方針などより自民族意識や信仰など自分の世界観を強調すれば、融合どころか取り返しの付かない衝突だって起こります。

こうした問題は理性に由ると思ひ勝ちです。理性でコントロール出来得るならば、このような問題は起こらないのです。しかし世界中実際に絶えず起こっているという現実を見れば分かるように、理性の領域ではないのです。勿論感情領域も大きいのですが、意志決定する時、如何にサ

イエンス的な背景を持った意志であるか否かです。理性はしばしば自分達に都合の良いように働く危険性があるのです。根本に自我があるからです。これをコントロールするのが本来の意志です。やはり己を後にして、大原則であるその国や地域の基本ルールに従うようコントロールするのが意志なのです。融合発展は大前提を共有したうえで、より高い未来への志が全体に受け入れられて自然に進むものです。

意志が健全に機能するためには、健全な知性と感性との深い関わりが必須条件です。それぞれが健全であればあるほど、三位の関わりも又自然に健全な関係なのです。

一番拙いのが自己実現要求のために自己主張が過ぎて、他と対立し無用な刺激を造り出すことです。その事でみんなが困るからです。

又問題を解決しなければならぬ時、何が何でもがむしやりに意志で押し通し貫徹しようとしても、気持ちと身体が着いて来なければストレスばかりが増幅してスムーズに事は進まず、却って問題を拗らせてしまいます。知性は必要性を理解し、又堅く決意しても、気持ちちが反発したり嫌悪していると身と心が離れてどうしても充分に機能しないのです。必要条件をきちつと整えるよう気持ちを整理し、その上でより知性的になるよう導くのも意志なのです。意志は無駄な精神行為をカットして単純化し、必要な作用を継続するためのエネルギーを供給することなのです。健全な意志は健全な感性と知性の証明なのです。

### 【三位の関係】

是の三位の関係が大切なのです。古来より言われている魂とか人格、或いは社会性や道義は知・情・意の融合一致領域に於いて発動する精神作用です。勿論基本的には三位それぞれが良質であることです。そして融合領域の大小・広狭がその人の、その時の安定度と、働きの質と内容を決定するのです。つまり三位が限りなく融合一体化するほど理想なのです。それぞれの力が相乗的に作用するからです。

「それは良いことだ。確かにそれは全体にとっても将来にとっても必要なことだし、第一に人としてやらなければ恥ずかしいことだ。及ばずながら出来ることは協力しよう。」と知性も感性も意志も同時に同調するので、何事に対しても何の抵抗もなく、究めて気持ちよく行為できるので。出来た人、人格者とはこのように作用するのです。

更なる功德として、この安定した状態は揺らぎが小さく、不必要な思惑も邪念も無いので日々惑乱・葛藤も無くて救われているのです。当然不安も不足も不満も無く、気持ちちが豊ですから自然に感謝報恩の気持ちも現れて、自ずから円満な人柄であり、道義や信義に基づいた生き方ですから至って淡々と自信を持って人生ができるのです。

逆に限りなく遊離するほど心がバラバラになりますから、コントロール機能は低下して双方向に刺激し反発し合い劣悪化していくのです。要するに決断が付かず、野心や邪念が噴出して不安定なので、何かに付けて不条理な理屈が出てきて騒がすのです。

責任約束は果たさなければいけない、と知性では分かっている、気持ちちが乗らなければやる気が起こらず、身体が付いていかないので。

「しなければいけないのだが・・・あれも是れも気に成る・・・避ける上手い手はないものか・・・」等等。この相殺心理は、三位の遊離が大きいことを物語るもので、これがストレスの大きな原因



となり人格低下を来すのです。

言い訳も種々に発生するし、不平不満は元より、惑乱・葛藤の苦しさを他の性に於て、しかも恥じない精神に成つていくのです。決断も諦めも、信ずることも任せすることも出来なくなるのはそのためです。是れが身に付くと性格になるのです。

欲望が先走りし、恥と恐れを超えてしまうと人ではなくなり、人を人と感じなくなつてしまうほど三位の関係は重大なのです。経済合理主義を極度に推し進める背景には、人の重みを感じられなくなつて欲望が優先するほど三位の関係が狭隘化しているのです。直ぐに切れて事件を起こすのは、喩え一瞬でも三位が完全に乖離して、知性も感性も意志も関係が断たれた状態なのです。この状態では自分の心であつてもどうすることも出来ない決定的な心の様子があつて暴走するのです。

これが悲しい人間の業性（業障）であり、何十億年も天敵と戦い、生存するために弱物を捕食し、須く勝ち抜いてきた生命維持本能の一姿なのです。生きている事自体が紛れもなく生命現象であり、心底に於いてはこのように自己中心に作用していることを決して忘れてはならないのです。自己中心の心底とは、自己絶対・他否定による残忍性、どう猛性となる業障が潜んでいると言ふことです。

仏道修行は本来に目覚めてこの業を解決するのです。即ち、三位が乖離する癖を除去するので。禅固有の語として、身心一如、徹する、成り切る、解脱、悟る、自己を忘る等が有りますが、癖を除去して本来に達したことを意味します。是れは三位が完全に融合一体化して何れも無くなつた状態です。

完全に融合合一して境が落ちた時、三位の元である心身が無くなつた自覚症状が有るのです。これが脱落であり見性です。

此処に於いて発露する心は、国境もなく人種や過去も老弱男女も無く、損得邪念も越えているので、極自然に「道」「法」にもとずき最善に向かつて作用するのです。是れが祖師方の内容であり仏智です。正しく般若の智慧です。

見性するには坐禅修行、只管打坐しかありません。そのためには世念を捨てて菩提心、向上心を強く持つことです。自己中心のままにしておく、簡単に俗念に心を奪われて、自己満足の快樂や安易な誘惑に落ちてしまうのです。結果、歎楽極まって哀情多しの通り、真の平安は無いのです。未来を決定するのは、今、今の行為です。善悪徳性を常に見極め陰徳を積むことと、道義・信義に悖らぬ事が大切なのです。

#### 【無分別智】

赤ちゃんは何の欲も邪念も囚われもありません。全く無我、無爲、無策です。純粹の天然物です。赤ちゃんのように純粹な心でありたいと誰もが願っています。だから汚れのないこの心が宗教の目指すところです。

そもそも赤ちゃんは三位が無く混沌です。五相（見聞覚知の道具。即ち眼耳鼻舌身）を完具していても、個々が確立して居らず、それ故統一的に機能していません。つまり自分が自分であることも、人間であることも、生きていることも、存在感も無いのです。確かに無分別世界であり、少しも汚れは有りませんが、これでは人としてやっていけません。

赤ちゃんが全て良いというのではなく、或る特定の精神性、即ち無分別智に深く眼を付けたの

が禅です。大人として精神が健全に機能していて、それらに汚されず囚われない心、即ち赤ちゃんの無分別智を理想として自我・我見を捨てて赤心を取り戻すのです。その法方が只管打坐です。社会性を備え羞恥心も自尊心も堅持した大人が、赤ちゃんの如く無分別智に還る事は並大抵のことではないのです。意識や知性や念が発生する前の世界に目覚めることです。人間を止めることであり生きながら死ぬことなのです。だから見性の大事を体得したければ大死一番し来られ、とあります。一度死んで（自己を捨てて）出直してこいと言うことです。見性することが如何に困難であり大切かが分かるはず。徹し切るとはそういうことです。

将にそれを達成するのが禅の本領です。それほど全てを捨て切ること、成り切る事は容易ではないのです。殊更に修行と呼ぶのはそれ故なのです。艱難辛苦を物ともしない決意と努力が要ると言うことです。是れが仏道修行、参禅并道の心得です。

普段「心」と思っているものは、観念現象としての言葉や概念になったもの、現れたものを指しています。それも心には違いなのですが、意識上に現れたものは全てバーチャルであり妄想・妄念・妄覚に過ぎないのです。本来の心は姿形も無く、勿論分別以前ですから意識も無いのです。つまり無意識の意識、無念の念、無分別智です。実体のないこの真相を体得すると妄想・妄念・妄覚の一切が消滅するのです。この違いが覚と不覚であり迷と悟になるのです。

では、本来無分別にして清浄だった赤ちゃんが、何故乖離して惑乱・葛藤の六度四生を形成していくのでしょうか。これこそが人間の業なのです。言語を覚え、概念を蓄積するに従って自然発生的に思考作用も感情も複雑になります。概念を操作する力、知力の強化発達は文化・文明を形成します。確かにどの様な事柄でも科学的、理論的にしかも精細に解明出来れば出来るほど難問は解決され、社会は発展していきます。この能力と努力はとても大切なことです。

しかし是れによって心を更に不透明にし不純にする事が問題なのです。それが社会問題、国際問題を煽り出すのです。知らず知らず自己主張と欲望追求を増幅し、自己弁護に長けると同時に相手を騙し倒す事を目的とするような精神構造になるからです。

心意識・念想観を逞しくすればするほど自我・我見は強固になり、直ぐに自己中心の妄想・妄念・妄覚して問題を発生させる危険を、もつと真摯に慎重に反省すべきなのです。知性豊かな国の指導者は、あの危険極まりない武器を更に開発しようとし、持った物は離そうとしません。

処が小学生に、持つが是か、持たざるが非かを問えば、答えは単純明快です。殺すしか用のない物騒な物など捨て去れば良いと。この差は何処から起こるのか、その涯際を確立するのが禅の命なのです。人として問われる「誠」の正体を確立するという事です。

全て自我が過ちを起こすのです。だから自我・我見を捨てる修養が必要なのです。釈尊の説かれた大乘の法門は、全ての人が自我を捨てて大安楽に成る道です。世界平和は心の平和が有って成り立ち、最強の安全保障は自身の心を平安にして、信じ合い、そして和することです。どうしても修養が必要なのです。余談が随分と長くなりました。提唱に還ります。

## 「経」

字義は布の縦糸のことです。縦糸が切れたら布にならないので、どこまでも不変な一本でなければなりません。転じて「常なり、不変なり、真理なり、法なり」となったのです。既に四書五経のように、聖人の教えを「経」として使われていたので適訳だったので。つまり、大事な道

が「経」であり、一束ねに纏めた物が「經典」なのです。

「摩訶般若波羅蜜多心経」を簡単に言えば、「大法の真髓を説いた聖典」であり「解脱するための大切な要点を説いた経典」と理解したらよいのです。要するに成り切って自己を忘じ解脱する道を説いた教典です。

大切なことは三蔵が心血を注いで釈尊の心をそのまま伝えようとしていることです。それは将に本当に行じて欲しい。そして本当に体得して欲しい、と言う願いだけです。

私たちが坐禅をするのは、本当に「マカハンニヤハラミッタシンギョウ」であつたと体達することです。これに勝る真実は無いのです。だから素直に、「マカハンニヤハラミッタシンギョウ」と一心に唱えることです。この間に一切余念が無ければ端的です。要するに一心に成れば自我・我見は無いのです。この時、一大事因縁が訪れるのです。永嘉大師、又お察の再来です。

これが直指人心見性成仏の様子です。この消息を体得するための道を説いているのが、この「心経」なのです。

いよいよ本分に入ります。見方によっては三段にも五段にも分けられます。弘法大師は五文節に見ています。坐禅修行に於いて分析は禁物です。

禅の世界は飛び切りです。その物に成り切れば、自ずから脱落して本来の面目が現前するので。故に一円相でケリが付くし天龍の一指頭、洞山の麻三斤、趙州の無で決着するのです。

いよいよ本分です。

### 「観自在菩薩。」

この般若心経は観音菩薩が説いたような文脈が始まっています。見方によっては一層端的になります。例えば「観自在菩薩曰く。」或いは、「観自在菩薩とは。」と見れば分かり易くなります。これから展開する仏法の真髓を示唆しているところです。

ここで「観自在菩薩」に付いて、大法の上から一ひねりしてみます。参究功夫の究めて大切なところですから、そうか！と膝を叩く者のあらば法の幸いです。

「観」とは観ることです。眼を開ければ山河大地が現成している様を「観」又「見」と言います。当たり前のことですが、しかし此処に大変重大な様子が有るのです。

「見た」と自覚する。その意識が発生する前に、眼には既に映っていた事実が有るのです。眼と、映る物とは直接的ですから何か介在する隙間は無いのです。眼を開けたら即、それが現れている。この心境一体、間髪を入れる余地のない様子。認識以前の、此処が着眼の要です。事実そのものは意識以前であり、意識や観念とは関係が無いと言うことです。此処が大切な処です。

その物は花とも赤とも綺麗とも表現出来ない無分別世界です。元来無為自然です。しかし我々の見聞覚知は実に良くできているのです。一見して花であり人であり、親であり子供であることが分かるし、鳴き声だけで牛か犬かが分かり、水に触れた瞬間、冷暖が分かれます。是れを端的と言い無分別智と言うのです。

眼にしても耳にしても何時も自由に勝手次第に作用しています。これを、観ること自在、即ち「観自在」と言うのです。

耳は音です。聞く、と自覚する前の出来事です。聞いた時は既に終わってその音は無いのです。これが我々の本当の様子です。つまり、一切の意識も知性も概念も言葉も手段も関係無く、囚わ

れも迷いも無い事実が堂々と在るのです。我々の眼耳鼻舌身意である全体作用がそうです。是れを觀自在菩薩と言うのです。これが本来であり大自然の不滅の法です。是の無爲大自然の法に目覚めるのが仏道修行であり參禪弁道です。

しかし心身が乖離している限りは様子が違います。既に終わった過去の事実を、意識で捕まえて情報化したのが、觀る、とか、聞く、と言う觀念です。無い物を後から作り上げた虚像ですから、バーチャルであり妄想・妄念・妄覺です。これを悪知惡覺と言うのです。みんな是れに欺されているのです。是の間違いをなかなか自覺することが出来ない人を、仏は衆生と呼んでいます。それでは折角の人生が台無しです。勿体ない限りです。惑乱・葛藤は辛く厭な筈です。そんな自分を根底的改革は出来ないものかと、本真劍に反省出来れば、無常に過ぎゆく年月を儂く感じて、俄に求道心が湧出してくるものです。

道元禪師は「無常を觀ずるの心も又菩提心なり」と言われました。腹の底から菩提心が湧いてきたら占めたものです。凍り付いていた処へ太陽が輝くようなものです。いよいよ切實に是の般若心經が必要になってくるのです。

「菩薩」とは道の人、真実の人です。妄想・妄念・妄覺が無く、悪知惡覺の無い人のことです。「觀自在菩薩」とは汚れない本当の我々自身のことです。本来自由無碍だと言うことです。

「行深般若波羅蜜多。」

深く般若波羅蜜多を行ず。

「深般若波羅蜜多を行ずる」でも「深く般若波羅蜜多を行ずる」でも同じです。「行深」とは徹底です。身心を擲って昼夜を分かたず行じることです。親鸞聖人は「一向に念仏せよ。」食べることも寝ることも忘れて徹底念仏しなさいと。同じことです。

坐禅の時は徹底坐禅です。呼吸の時は徹底呼吸です。勉強の時は全身全挙して一心不乱に勉強する。食事の支度も片付けも、歩く時も余念を入れないように徹底行ずる。「今」この一瞬を、我れを忘れて行ずることです。是れが「行深般若波羅蜜多。」です。

「今」何をするかは、人それぞれの様子ですから一口には言えないことです。ですが「今」すべき事を、余念無く一心不乱にすることに変わりありません。是れが生きた仏道修行です。

初期修行は心が静まらないものです。坐上に心を置いておきたくても、一呼吸を護ろうとしても、一歩だけに成ろうとしても、癖付いた拡散状態は平常心を目茶目茶にします。何をどうして良いのか見当が付かないために闇雲な坐禅でしかないのです。如何に心念紛飛する癖が強烈かを知らしめられ、妄想・妄念・妄覺にさんざん苦しめられる時です。身に付いた思考の癖は、片時も休むことなく連鎖して妄想を繰り返します。これも一時の仮の様子であり固定してはいませんから、決して気落ちする事は無いのです。ここで根負けしたらお終いです。如何に猛しい癖であっても実体が無いのですから菩提心、努力心を専らにして真つ向勝負を続けて居りさえすれば必ず破れるのです。実体は無いが心は一つですから必ず壊れるのです。

とにかく脇目も振らず一心不乱に打坐することです。精魂込めて一つ事に打ち込んでいると、無駄な精神行為が自然に取れてくるのです。

例えば破損した地中の水道管を補修するとして、初めは廻りの野次馬が気に成ります。しかし溢れ出る水との戦いに全力投球せざるを得ませんから、いつの間にか廻りのことを忘れていきます。

余念が修まり仕事に夢中に成れば成る程、心身が軽くなり無駄なく能く動くのです。その事だけになり、一心不乱にするのが最も仕事効率が良いのです。

坐禅も仕事も呼吸も同じです。その事に没頭するほど余分な心的行為が修まります。一心不乱に「只」吸い、「只」吐く。是の単純なことに徹底するのです。初めは呼吸を逃がさぬように、呼吸を捕まえようと無我夢中で頑張ります。雑念煩惱との戦いです。そのうちに頑張りが徹底してくると、捕まえようとしていた念、逃がさぬようにしていた念が入り込めなくなるのです。捕まえようとしなくても、呼吸は逃げることも隠れることも出来ない。ちゃんと初めから自分の上に明らかに在る。是の事実が気が付くのです。この気付きを「即今」とも「即念」とも「只」とも「今」「事実」ともいいます。「念の無い念」「心の無い心」「前後際断した念」「虚」「空っぽ」のことです。即今がはっきりすると、出た念は既に終わっていることが分かるし、雑念を無視する力が具わります。この時から修行の着眼がはっきりして急に楽になります。少しずつ念無しに見ることも聞くことも出来るようになるのです。

ですが此処に気付かない限り、出た念に必ず心を取られてしまい、妄想して惑乱します。従って手の打ちようがないので拡散の癖は治らないのです。徹するには、出た念を認めず、手を付けずに放置する事が一番です。しかしその急所が分からない以上どうすることも出来ません。着眼が分からない悲しさです。

即今が手に入ると身も心もふつと軽くなり、視力が上がったかと思えるほど全てが鮮明に見えるのです。それだけ心のブレが修まってきたのです。即今を護ればよいのです。この努力を只管功夫と言い、これが癖を落としてくれるのです。要は「今」「只」淡々とすることです。

功夫についても少し加えておきます。何が何でも文句なく無我夢中で一つ事に没頭することです。単純な事を一心不乱に為し続けることです。一呼吸、一呼吸を離さず、丁寧にすることです。吸い始めを自覚し、中を確認し、吸い切ったことを確認して片時も呼吸から心を離さぬ事です。

これが散漫癖を取り、身心一如に戻す端的方法です。是の単純な努力を続けてさえ居れば、自然に前後の観念が取れ、連鎖し連続する癖も拘りの癖も自然に取れていくのです。

仏道修行は特別な何かをするのではなく、朝起きて眠るまで、「今」の自分を見失うことなく、余念を入れずにその事に成り切り成り切りすることです。

坐禅の尊いところは、本当に菩提を究尽して尽未来際救われることです。上求菩提、下化衆生の高い理想を指針として即今底に徹して自己を忘じ切るのみです。

要するに是れが「深般若波羅密多を本當に行じる」ことです。是の努力をしなさいとのお示しがこの心経なのです。これが釈尊直伝の仏道修行ですから疑う余地は無いのです。

徹底是の努力をすれば次のように成るぞと。

「時照見五蘊皆空。度一切苦厄。」

五蘊皆空と照見した時。一切の苦厄を度す。

「時」は時節です。今この時です。偶然ではなく、成るべくして成ったと言うことです。「照見」は徹底、即ち脱落です。「五蘊」は五つの縁の寄り集まりのことです。「皆空」とは実体が無いことと、縁次第で自由自在に何にでも成るの意です。実体無きを縦軸とし、自由自在を横軸として、縁によって万物が草創育成し活動しているのです。

食べ物が口に入ればその味は有る。しかしその味を抽出することはできないのです。実体が無いからです。又、喉を通過すれば縁が無くなり、実体が無いので残る物も無く、留まる物も無く、

どんな味も綺麗に消滅する。だから次の縁に由って又その味が出現すること自由自在です。有りながらその実体が無いからです。では味とは何か？ 感覚であり幻なのです。無いが縁次第で現れる。だから衝突も混乱もなく、公平無私に運流転しているのです。「皆空」とは是の事です。心も又そうです。この事実を人類最初に発見されたのが釈尊でした。

我等は「皆空」と決着付けて初めて人生の成功者なのです。即ち、「一切の苦厄に実体が無い」ことを実証して大平和と大満足の境界に達したら、それ以上の世界が無いからです。

少し踏み込みます。「五蘊」は「色受想行識」。「蘊」は蔵する、寄せ集めの意です。「色」は人と物。「受想行識」は精神作用です。人は眼耳鼻舌身意を兼ね具え、色声香味触法と働く活動体です。見聞覚知です。我々は五要素の縁に由って、今、仮に身体としてこのように有るだけで、実体は何も無いのです。毎日活動していますが、全て「五蘊」の作用に由るものです。

抓つねると痛いですが、味覚と同じく、眼や耳と同じく、痛みの実体は無いので抽出することも留めることも出来ないのです。縁ですから縁が無くなれば痛みは消えるのです。見ても聞いても眼にも耳にも一切跡形が無いのと同じです。先に見た物、聞いた者が残っていないから自由に活動して、而も変質したりすることは一切無いのです。縁さえあれば又何時でも何度でも抓れば痛みは復活するのです。

要は全て縁であり、今、仮にこのように在るだけだと言うことを本当に自覚することが大切なのです。体得です。そのための坐禅修行です。

家も着物も同じです。木材を初め多くの建材を組み合わせて家と成る。着物でも一本の糸の寄せ集めです。家といい着物といい、木材といい糸といい、その物に実体が無いので、どのような形にも大きさにも自由自在に作れるし、何時でも壊すことが出来るのです。是れが真実の様子であり普通の法です。是れを「五蘊皆空」と言うのです。

坐禅に徹し切ると是の様子がはつきりするのです。四苦も三毒も一切の悩み苦しみも、実体の無いことが本当に判明した刹那に一切氷解するのです。是の事を「五蘊皆空と照見した時。一切の苦厄を度す。」と言っているのです。

我々は好むと好まざるとに関わらず、オギャーと一声した時は既に純天然物のこの眼耳鼻舌身意の道具をみんな丸抱えしています。是れが身体です。身体の道具は父母の縁に拠って寄せ集まったもので、実体が無いから縁が無くなれば丸ごと元の大自然に還るのです。確かに「皆空」ですが、是の事に気付かないために問題が起こるのです。

問題の根源は、物心が付いてよりいつの間にか是の心身を自分だと固執してしまったことです。実体が無いのにこの心身を在ると思いで、他と区別するその念が離れなくなりました。謂わば自分と言う塊を認めた時から他が発生したのです。是れが自我・我見の確立です。

是れにより心と身体が乖離したのです。心が幽霊のように取り留めが付かなくなったのはこの時からです。つまり意識界を限りなく駆け巡る癖が付き、概念と思考系の拡大により迷動して止まらなくなったと言うことです。

自然発生的に心の内に自と他と、是と非とのように、何かに付けて対立的相対的に思ってしまう癖が付いたのです。外界が気になり人や物が気になり、見た物、聞いたことに心が騒ぐのはその為です。常にあれか是れか、損か得かという要求や理屈や好き嫌い、取捨する心に付きまどわ

れて終末が無いのです。

この展開が欲望や怨や不平であれば猛い感情も疑心暗鬼も加わることになり、この取り混ぜが即ち惑乱・葛藤であり争いまで引き起こすのです。外見はともかく意志や理性で対処出来ないために古来より皆な苦しんできたのです。三毒も四苦も六道四生も凄まじい煩惱のことで。元は心と身が「隔たり」を起こしたためです。元の身心一如に還れば実体のない縁のままに、皆空ですから縁と親しく自在にするのです。徹するとは是の事です。是れが安住です。

釈尊は是の苦しみを解決するために六・七年間難行苦行されました。それは極限まで身心を酷使して耐えることでした。しかしそれは間違いだと気が付かれて、それまでとは逆に身も心も用いない努力をされたのです。つまり動かないことであり心を徹底遣わないことでした。是れが坐禅です。耐える必要のない状態に於いて、何が起こるのか。問題は何かを探求されたのです。

身体の不動は誰でも出来ませんが、心の不動は当初とても出来ません。釈尊も同じでした。湧出し続ける雑念煩惱に苦しめられていたので、その正体を説明しようと決意したのです。

解決するにはその出所を究明する以外にない。出所を究明するにはどのようなするか。「今」瞬間に現れ、「今」瞬間に消える以上、「今」瞬間に着目するしかない。と定めた釈尊は、「今」に着眼して出て来る元へ、元へと精細に追求し続けたのです。言葉を換えて言えば、雑念煩惱を払いのけ、払いのけて心が発生する源へ迫ったのです。それには坐禅が最適だったのです。六年端坐の末、遂にその元へ到達して一切を明らかにしました。

今より凡そ二千六百年前、十二月八日。朝靄あさもやの中、樹下石上で起こった明星一見の大事件でした。明けの明星と釈尊が一つに成り、否、迷いが発生する以前は、見た物と一体同化して、自己も囚われも何も無かった。皆空であったと自覚されたのです。

「我れと有情非情と同時成道、山川草木悉皆成仏」と大自覚された内容は、「時照見五蘊皆空。度一切苦厄。」と同じです。

この一大事因縁が全人類にどれほど大きな救いに成ったことか。人類が初めて根底から救われる道を得た瞬間であり、それ故に人類最大の聖人として、大聖釈迦牟尼仏と尊崇されているのです。

難行苦行されて得た心身の鍛錬は、究めて高度に磨き上げられていて、精緻にして繊細に研ぎ澄まされた感覚器官と観察力は、一般を遙かに超えて神通力の域に達していたのです。

苦しみの動機として「眼耳鼻舌身意」があり、「色声香味触法」がある。即ち全ての身体感覚です。見聞覚知のこれらの機関は全て縁に依って瞬間に作用するだけのもの。実体は何も無く、本来無為自然であるから人間の思いなどは関係なく厳然としている。真理であり法である。

ところが忽ち見た物、聞いた者に囚われて雑念煩惱が発動する。これが一般の様子です。つまり念を起こすと想念の連続が始まり、是れが雑念煩惱である。想念の連続は「受想行識」という構図で展開することを発見したのです。

これらは釈尊ならではの追求と観察結果です。遂に知性や科学ではどうにもならない煩惱発生の原理を解明されたと同時に、その解決方法も明らかにされたのです。さすがに大聖釈迦牟尼仏であり、その凶り難い求道心と精緻さに畏懼するばかりです。

その驚きの一つに、「受想行識」と連鎖する速度は何と一秒の千分の一よりも遙かに速いと言うことまで突き止められました。「一弾指に九百の生滅有り。」と。指を弾く瞬きほどの時間です。

女性を見た瞬間、「女性」だと意識した一念の発生と同時に美醜感、憧れ、取捨等々の多様な感情と念が発動する。同時に、過現未の時間観、空間観も即時誘発され一瞬にして、心全域が想念、妄想、妄覚で覆い尽くされる速さと凄まじさ。釈尊の観察結果から、瞬きの間に凡そそのような九百ほどの心的活動が有る。それほど身に付いた想念の癖、即ち囚われは猛いのだと云われました。

瞬きは凡そ二十五分の一秒とも五十分の一秒とも言われています。一弾指(指をパチッと弾く)もそのくらい早いのです。「一弾指に九百の生滅有り」は不惜身命の暁に得た結果なので決して軽くはないのです。徹するとは将に「時照見五蘊皆空。度一切苦厄。」の一大事因縁を体得することです。

この經典は釈尊の内容であり、悟りの消息を語ったものです。実に簡潔にして無上です。釈尊はこれから十大弟子を中心にこの消息を伝えようと大法輪を転ずるのです。とりわけ目につくのは舍利子です。

「舍利子」

舍利子よ。

「舍利子よ。良く聞きなさい。」と詰め寄るような気迫で語りかけています。徹底を期するためです。

是れほど素晴らしい道は他には無いぞ。本当に自己を忘じ切れば訣着する。未だじゃ。未だじゃ。弃道精進を怠るなよ！と、徹し切りの足らざる処をずはり指摘したのです。

居並ぶ十大弟子はもとより、全大衆いやが上にも菩提心が燃え上がります。

「今説いた法が完全に自己の消息でなければ本当に救われてはいないのだぞ！」とたたみ込むように説きつつ点検しているのです。般若心経全体にみなぎっているこの気迫は、そのまま釈尊の慈悲なのです。この時は既に十大弟子みな一隻眼を具していましたから、悟りの垢を取って大成(大悟)に導いているのです。

この短い説法中に二度も呼びかけているのは、釈尊はよほど舍利子に期待していたからです。又この心経に比喩いが全く無いのは、彼等が生粹であり、端的な法と更なる菩提心だけが入用だったからです。

気合充分な釈尊は、是れよりとつときの法を獅子吼されるのです。獅子吼とは百獣の王の一声に因んで、何者も救い尽くさずにはおかぬ宇宙大の説法と言う意味です。

「色不異空。空不異色。色即是空。空即是色。受想行識亦復如是。」

色は空に異ならず。空は色に異ならず。色は即ち是れ空。空は即ち是れ色。受想行識もまたまた是の如し。

これよりいよいよ詳細に「色」と「空」の関係を説き明かして、法の円満無欠を計るのです。「色」は人と物。即ち無限の縁であり相であり差別です。宇宙全体です。而も時間的にも空間的にも縁限りの物です。それは実体が無いと言うことです。

全て常に変化しています。生まれた暫くは赤ちゃん顔ですが、次第に男女の相が明確になり、



花のように美しい娘になる。四十も過ぎれば目付きまで堅くなり風を切って歩くようになる。後は御決まりのコースです。

春はいつの間にか夏となり秋となるが、全て宇宙総ぐるみの縁、無辺の縁の絡み合いの様子です。「今」が「今」で無くなる姿が即ち変化であり流転です。「今」確かに有りながら無い。流転変化があればこそ我々の生活が成り立っているのです。それが人生であり物事の真相です。

縁に由って起ることでですから是れを縁起と言ひ、因縁所生の法と言ひます。実体が無い証拠であり、「空」の証明です。だから「色」は「空」から漏れることはないのです、「空」の働きが「色」と思えば間違いないのです。

是の事を簡潔に「色は空に異ならず。空は色に異ならず。色は即ち是れ空。空は即ち是れ色。」と言ったのです。

「受想行識もまたまた是の如し。」同じ事じゃと。

受も想も行も識も、やはりその時限りの縁の姿に過ぎず、何れも時が違い作用が違う。受の時、想の時、行の時、識の時で完結していて、一連でもなく連続もしていません。これを一時の法位と言ひやはり「空」の様子です。本来前後際断していることを知れば良いのです。

つまり全て心であり別物ではないので、思うまま、考えるまま、感じたまま、その時それです。振り向いても何も無いから振り向くなと言ふことです。

此処が問題なのです。出た念に囚われるから惑乱・葛藤するのです。徹すれば身心一如となり、身心一如は念も無く、念を振り返り見ることもないのです。要は即今底に徹して体得することです。

「舍利子」

舍利子よ。

「舍利子よ。」「二度目のこの言、雷よりも懼るべし。胸ぐらをむんずと驚づかみしたと同じです。その眼光や、その威厳や、閻魔も身震いして命乞いするしかないのです。

何もかも放下して徹し切らないと、これから説く大切な法に目覚められないぞと。慈悲また慈悲、寒毛卓立です。

「是諸法空相。不生不滅。不垢不淨。不増不減。」

この諸法は空相にして、不生、不滅、不垢、不淨、不増、不減なり。

「是の諸法」とは万物固有の作用。つまり水は水の、火は火の、眼は眼、舌は舌の作用、つまり森羅万像のことです。

縁ですから実体が無い、即ち「空相」ですから何に成るか、どの程度かは縁次第です。一つ物の分かれですから、人が人に留まらず、花が花に留まらず、生が生に留まってははいないのです。生に実体が無いから縁が有れば生まれ、縁に由って死ぬし、死に実体が無いから縁に由って死に、縁が無ければ死ねないのです。

生は生であって、生の中に死は何処にも無いのです。生はどうしても生です。徹底生です。死も同じです。須く無爲自然の働き、即ち空相の様子です。

前後を付けた比較したりするから、生滅も垢淨も増減も生まれるのです。姿形に囚われた人

の見方であり形容であり名相です。縁そのものには、そう言う邪魔物は無いのです。それらに名前を付けたたり、形容したりするのが妄想・妄念・妄覺です。この癖を除去するのが仏道修行です。「不」で邪魔物を打ち消して「空相」に目覚めさせているのです。

その物には邪魔物はありません。何時もそれがそれで完結しているのです。だから縁のまま「只」在れば癖が取れるので、必ず空相に気が付く時節が有るのです。その刹那、一切の邪魔物が無くなるのです。「無」「不」の真相が確かに手に入って洒々落落の境界となるのです。

ここは解脱の働きを細かく説いたものです。要は「只」の体得でありそれがそのまま「不」の体得なのです。

そのために邪魔物である自己を取らねばなりません。それには法を与えたり、拘りを奪ったりして「只」に導くのが指導者の任務であり力量です。

即今底は空相です。だから何処に生じやの滅じやの、垢じや浄じやが有るといふのか。生滅垢淨増減等は須く人我の見に拠る意識の分際じやから即捨てよと言ふことです。即今底にその様なものは無いことを知らしめるために、邪魔物を「不」で奪い「只」に導いたのです。次ぎも、その次ぎも「無」で打砕くのです。

「是故空中、無色、無受想行識、無眼耳鼻舌身意、無色声香味触法、無眼界、乃至無意識界。」

この故に空中には、色も無く受想行識も無く、眼耳鼻舌身意も無く、色声香味触法も無く、眼界も無く、乃至意識界も無し。

「無」で意識辺を叩きつぶし奪い去って空っぽに導いた所です。先ず「空中」は、と本題を持ち出しました。そうしておいて、以下ざらりと並べた精神作用も感覺機能も全て実体無きが故に、そうした名相や形容に関わるなど言うことです。

言葉や名前や概念を捨てても、熱いものは熱いのです。塩は辛く砂糖は甘いのです。それが事実であり確かな法です。何処にも自己は無いのです。是れが無分別智であり般若の智慧です。

是の事を本当に体得するためには、名前や言葉や念から離れなければ駄目なのです。これらがづらりと有る間は真実から隔たり、無為自然ではないからです。

徹底捨てなさいと言ふことは、精神作用も感覺機能も全てです。となると是の心身を捨てよ。

自己を捨てよと言ふことです。生きながら捨てることを「自己を忘ずる」といふのです。それを「無」で強調したのです。つまり、意識無く、自己無く、「只」受想行識をしなさい。「只」眼耳鼻舌身意をしなさい。「只」色声香味触法をしなさいということでした。

こうして「空」「不」「無」で以て一切合切奪い取られてはどうすることも出来なくなりました。

そうなのです。釈尊はそこが狙いなのです。どうすることも出来ないのだから、一切何もするな。身も心も遣うな。動かすな。見るな。聞くな。思うな。生きるな。死ぬな。

畢竟どうする。

「今」「只」在るのみ。縁のみ。こうして徹底意根を坐断せしめて癖を取り、大悟させようとしているのです。

大燈国師が一隻眼を得て、明眼の師に点検を乞うと皆「是」としてその境地を認めました。本人は無我の連続といかない何か引掛かっていることに納得せず、遂に大燈国師に出逢いました。間髪を入れず性急な問法の始まりです。道有つて身無しです。大燈国師は「まあ、茶を飲め」

と。しかし「生死事大。無常迅速です。それどころではありません。」と大燈。すると大應国師は「汝、仏法を知らず。」と一言でたたみ込み、悟りも求心も擬議もすべてを奪い取ったのです。何物か仏法に非ざる。即今底が仏法ではないか。茶を飲む時は、「只」茶を飲むのが仏法であるうがと。後、徹して是の玄旨を大悟し、「汝は雲門の再来じゃ。」と大應国師を唸らせました。

大燈国師の「槐安國語」かいあんこくごは無類です。蓋し、悟後の修行に開くべき玉書で、大凡未悟には齒が

立ちません。雲門大師も大燈国師も境界は一入立派ひとしおであり、共に足を傷めておられた祖師です。

雲門大師の師匠はあの雪峰禪師で兄弟子が巖頭。その師匠が徳山禪師です。

殆ど同時代の大宗師が趙州古仏です。十八で大悟し、後四十年間師匠の南泉普願禪師の本で悟後の修行をし、六十才より行脚に出て二十年間、明眼の宗師を歴訪して研鑽されました。將に祖師の中の祖師です。八十才にしてようやく弟子を迎え入れ、二十名の英哲漢を打出した古仏です。

入門したばかりの巖陽は、素直に趙州禪師に聞きました。「入ったばかりです。修行とはどうすることですか？」州曰く、「お粥をたべたか、否か？」。「頂きました。」では、鉢を洗ったであろう。「この一言で巖陽は即今底に気が付き、仏道修行の大事な着眼を得たのです。一切の道理から離れ、「今」なすべき事を「只」すればよいと。後、大悟して天下の大宗師と成り、あの「趙州録」を顕したのが是の祖師です。

「無受想行識」に就いて付け加えておきます。「受」の時は「受」しかなく、「想」「行」「識」と作用しますが、それぞれの働きは時が違うので、全く連続性も無く、それぞれその時限りの作用で終わっているのです。此処が禪の本領であり仏法の命です。それが「無」です。此処が明確に成れば前後の無い端的に目覚めて一切解決するのです。

「無」は即ち心に持ち込まないことです。持ち込まねば「受想行識」と連続しないのです。是れが「無」の意味であり脱落のことです。是の事が本当に分かった時、実体が無いことを体得した時です。解脱した時です。

ではどのようにすれば心に持ち込まない「受」か。將にここが只管功夫の急所です。見聞覚知のままにしておくのです。「只」見、「只」聞いて、心に留めない、持ち込まない、心を動かさないことです。と言うことは眼耳鼻舌身意を無視することです。要するに「只」見、「只」聞くことです。

思考は瞬時に「受想行識」と作用することです。これ自体が心であって、本当にこのままであれば何も問題は無いのです。では何故一般の「受想行識」ではいけないかを自覚することが大事です。

普通「受想行識」することは、自己を立てて対象化し認めることから始まります。心に取り上げてあれこれ取捨是非比較し詮索することです。此処が問題の震源地です。この瞬間に心の大地が揺れて波風が発生するのです。

つまり実体の無い心の働きなのに、自己が有るために妄想・妄念・妄覚するのです。これが「受想行識」です。だから相手が気に成るのです。対立するから争うことにもなり、勝とうとして色々策略など邪念して惑乱・葛藤して苦しみが着いて廻るのです。先ず是の癖があること。つまり自己・自我の有ること事を能く自覚することです。「受想行識」するとはそういうことです。是

のことが分からないから、是れが当たり前になっているのです。仏の目からすると、是れは明らかに顛倒夢想しているのです。

自分で出したぎりぎりの結論でありながら確信が持てなかったり、或る時は絶大な固執をして全体を混乱させたり、又或る時は訳もなく不安となり不満となったりします。何か介在し邪魔をしているからです。

何かとは自己です。心身の隔たりであり相手立てる癖です。是れが大課題なのです。

本来は実体が無いので、何を考えても、感じて思っても、それ限りで終わっているのを取り上げる者も無く、取り沙汰する自己も無いのです。何もかもきちつと始末が付いてさっぱりしているのです。これを「無受想行識」と言うのです。身心一如に目覚めない限り、受想行識は妄想・妄念・妄覚なのです。次ぎも同じです。

#### 「無眼耳鼻舌身意。無色声香味触法」

「眼耳鼻舌身意」と「色声香味触法」は我々の心身とその働きのことです。「無」は条件も手続きも必要なく、これらを無制限に遣い尽くして跡形が無い事です。これら全ての機関は好き嫌い取捨無く、瞬間々々「只」機能してそこで立ち所に終わっている優れものです。今有って、即無いということです。だから次々に、自由に、条件無しに眼耳鼻舌身意が作用できるのです。この簡潔にして跡形が無い、而も無制限に作用することを解脱と言うのです。これが「無」の意味です。この真相を体得して、自らの繫縛けはくを解き、空相を自由に使いこなすのが仏道です。これが「無

眼耳鼻舌身意。無色声香味触法」です。

「意」も実体は無いのです。なのにその作用は全ての情報を取り纏めるパイロットです。道であることを知り、自分が自分であることを知り、因果の道理を弁え、間違いを間違いだと知るので「意」が「法」と成るのです。

大事な事は「眼そのものが見ている」などと思つて見てはいないということ。耳も「聞いている」などの念はないのです。自由自在に「只」見聞覚知しているだけです。自己さえなければ眼耳鼻舌身意・色声香味触法のままで何事も無いのです。涅槃なのです。我々はこうした天然の勝れた存在なのです。是の事を自得して大安心を勝ちとるのです。

自己が有る限りずっと「受想行識」の練り廻しとなり、惑乱・葛藤のリンクから解放されることなく、心が定まる事が無いために悪知悪覚によって六道四生から逃れることができないのです。

とにかく受想行識・眼耳鼻舌身意・色声香味触法を忘れて真剣に坐禅することです。徹すれば前後際断、即ち「無」となるのです。

#### 「無眼界、乃至無意識界」。

此処は随分中を省いているので、少し補足しないと分かりにくい所です。

眼耳鼻舌身意・色声香味触法を六根六境と言ひ、合わせて十二処になります。さらに眼にも耳にもそれぞれの意識界が随伴するので、厳密に云うと六根・六境・六識で十八界になります。

そこで最初の「眼界」で代表し中の十六界を「乃至」と省略したのです。そして最後の「意識界」を取り上げて、意識も実体が無く、無為自然の作用であり、全てその時限りの本当の様子ながら何も無いのだ。本当に見る時、見るという者も無く、見ている自分も無いのです。此処が問題なだけです。色々細かに取り上げては実体のないことを解いています。要するに「隔たり」

を取り身心一如に目覚めなさい。徹し切って脱落しなさいと言うことです。

何故厳密な釈尊が大幅に省いたかという点、十大弟子達はこのような法理は既に究めていたからです。「お前達、此処がはつきりしないのは未だ自己が有るからだぞ。」と徹底を促したのです。

「無無明。亦無無明尽。乃至無老死。亦無老死尽。」

無明も無く、亦無明の尽きることも無い。乃至老死も無く、また老死の尽きることも無い。

「無」は空の別名です。実体のないことです。自己が無ければ無明は無いのです。自己が有れば妄想・妄念・妄覚しますから無明です。自己が有る限り本当の事が分からないので、無明は尽きることはないのです。是れを「無明も無く、亦無明の尽きることも無い。」と親切を尽くしての説法です。

箸は箸です。徹底箸です。箸に自己は無いのです。無我です。坐禅は坐禅です。坐禅は無我です。是のことが何の疑団無く徹底臍落ちしなければ、なお無明です。自己が有ると言うことです。徹すればその物自体です。この瞬間にその物がその物の真相を教えてくれるのです。

本来、坐禅も箸も、光明とか無明とかに関係無く、「只」坐禅、「只」箸です。その物自体にはその様な理屈は一切無いのです。徹底その物で余物は無いと言うことです。坐禅に徹した時、坐禅によって自己の無いことを知らしめられ、実体の無いことが証明されるのです。この一大事因縁を体得するのが坐禅修行です。

「乃至老死も無く、また老死の尽きることも無い。」

老死は生老病死の四苦です。四苦も六道四生もみな心であり煩惱の様子です。心身の隔たりであり自己によるものです。即今底に成り切る事は老死に成り切ることです。この時、老死そのものには自己の無いことが分かり、自己が無ければ老死は無いと確信します。生老病死は人の常であり尽きることはありません。「老死も無く、また老死の尽きることも無い」とは是の事です。受想行識も人の常である以上は尽きることはなく、眼耳鼻舌身意も無く、また眼耳鼻舌身意の尽きることもないのです。徹し切って身心一如に目覚めた消息ですから、この論法は何れにも適合します。

正しい修行は難行苦行することではなく、相手を見ず、余念無しに「今」「只」することです。是れが生きた般若心経です。日々の生活の全てが法ですから、食事の支度も掃除も、片付けも洗顔も余念無く「只」する時、「隔たり」が取れて法が入って来るのです。是れを「縁より悟入す」と言うのです。

大切なことは、とにかく何事も深く行ずることです。深くとは徹底ということす。

至道無難禪師は、

「無色声香味触法」を、モトヨリナキ也。

「無限界乃至無意識界」を、前二同。

「無無明亦無無明尽」を、無明モナシ、又無明ノツキテナキト云ウコトモナシ、元来ナキト云事ナキト思ウ事モナカレ。

「乃至無老死亦無老死尽」を、前二同。

無というもあたら言葉の障りかな 無とも思わぬ時ぞ無となる

思わじと思ふものを思うなり 思わじとだに思わじな君

実に簡明にして端的で面白い説き振りで。字眼はやはり「無」です。

「無苦集滅道。無智亦無得。以無所得故。菩提薩埵。依般若波羅蜜多故。心無罣礙。無罣礙故。無有恐怖。遠離一切顛倒夢想。究竟涅槃。」

苦集滅道も無く、智も無く又得も無し。無所得をもつての故に。菩提薩埵。般若波羅蜜多に依るが故に。心に罣礙無し。罣礙無きが故に。恐怖有ること無し。一切の顛倒夢想。究竟涅槃を遠離す。

此処はとても面白い所です。「無」の集大成です。

「無苦集滅道」を至道無難禪師は、空ニ苦ナシ、集ナシ、滅ナシ、道ナシ。と全てを御破算にしました。零を掛けたら全て零です。坐禅は零です。坐禅に徹し切った時が零です。零が仏です。「只」です。山川草木悉皆成仏です。

釈迦殿よ。初転法輪に於いて、人生は是の心身が有る限り苦集滅道などと言うて、泣く子に飴玉など嘗めさせて上手く泣き止めさせたが、この俺は欺されんぞ。是の呼吸の何処に苦集滅道が在るんじや。立つ、歩く、食べる、行住坐臥、喫茶喫飯の何処にそのような汚らわしい者が有るといふのか。有ると言い張るなら、即今此処へ出してもらいたい。「我れと有情非情と同時に成道。」と歡喜して叫ばれたが、あれは嘘ですか？ と本来の零を突きだして釈尊に詰め寄ったのです。

釈尊は最初に四聖諦と八正道を説かれました。最も有名なあの初転法輪です。その時は囚われ苦しんでいる衆生の立場で話されたので、苦集滅道の説を皆ご尤もですと有り難く肯うけがったのです。小学生には小学生に説く法があり、大人にはその向きの法があるからです。是れを対機説法と言います。

此処では前言否定して裏腹に、苦集滅道など無いと断言したのです。だから只では済まされないのです。あの釈尊に二枚舌有りと、後世の愚か者が迷はないようにちよつと正法のために手当をしておこうと言う訳です。

今、無難禪師に正体を暴かれ丸裸にされた釈尊は、横丁を向いてにこりとして曰く、「だから本来は違ふと言うてある。即今底に苦集滅道などは無いと、此処でちゃんと理を言うておるではないか。」と言わんばかりです。

「八正道」の中心は禅定を鍊ることであり、徹して本来を体得する。その道を示されたのが是の心経です。その理りとは「無」の「苦集滅道」です。これが釈尊の真骨頂であり真髓です。「苦集滅道」を超越した真の境界です。徹すればこの道が明らかに成る。つまり心身を忘れて即今底に安住し切れば、自ずから苦集滅道は方便であつた事が分かるのです。

自らの意志で修行を目指してさえ、なかなか坐禅に没頭できるものではないのです。しかし好きなことや得意なこと、或いは勝負事は寒さも空腹も眠気も忘れて没頭し夢中になります。嬉々として徹夜も平気でします。ところが厭なことや辛いことは、いちゝゝに意識辺が着いて廻りま

す。平素はその様な気持ちは無いのに、自然に不満や嫌悪感が沸き起こるのです。ましてや理不尽

な命令などとなると心身共にたくたくに成り、しかも相応しい労いの言葉も処遇もなければ、腹に不気味な一物が居座って何時までも毒気を垂れ流すのです。自分でも不愉快ですから忘れたいのですが、知性の領域ではないので思い方、考え方では解決出来ないのです。その領域は知性も理性も届かないので、妙なものが信念になると実に厄介なのです。信念に成ったものはなかなか取りきれぬものではないのです。

何故なら生命維持本能の領域だからです。その本能には天敵観念があり自己絶対・他否定に働きます。此処に焼き付けられたものは生存の危機に関わる本能ですから、意識ではなかなか処理できないのです。その一物は声でも姿でも縁に遇えば何時でも忽然と現れ、自分を護るために敵視する一物だから厄介なのです。

是れこそ苦楽共に実体が無い証しであり、心とすべき者が無い証拠です。無いのに是れまたどこからともなく現れるのが自我・我見の凄まじい所です。

では、自我・我見の無い自分とはどのような心なのか。「今」「只」の心。空っぽの心です。好き嫌いや是非など、自分の見解や気持ちに囚われない心です。実体が無いことを明らかにした心です。是の心境を境涯辺と言い、知性による理解とか想像などでは思いも及ばないのです。何も無い心だから不変なのです。是れを簡単に解脱と言いますが、得るのは簡単ではありません。心身の「隔たり」を取り、元の身心一如に目覚めなければ体得出来ません。

参禅弁道はまさにそのための努力です。昼夜を問わず、素直に即今底に参入することです。「今」「只」することです。努力を怠らねば自然に禅定と成り、徹する時節が訪れるのです。本当に身を捨てて求道する時は昼夜は無いのです。是れが菩提心です。行深般若波羅密多です。

「無智亦無得。以無所得故」  
むちやくむとく いむしよとくこ

智も無く又得も無し。無所得をもつての故に。

至道無難禪師は、

「無智亦無得」を、空ニ智ナシ、ウルコトナシ。

「以無所得」を、云ニ及バズ。

徹し切って「只」に達し、知るべき者も得る者も無く、一切が絶えたの意です。何時も一杯一杯だから言うことも思う事も得る物も何も無いのです。

食べているではないか。歩いているではないか。「今」それをしていないか。箸で掴み口に運ぶ。口に入れば咬む。是れ自体が真実であり法ではないか。「今」「今」で一杯々々ではないか。他に何が有る。

更に「智」るべき何か有るように思ったり、それ以外に「得」るべき物が有りそうに思ったりする癖が自我・我見であり妄想・妄念・妄覚です。この癖を取るための坐禅修行です。

徹し切らないと、意識の片々が邪魔をして無意識の囚われと成るのです。是れが阿頼耶識と言う魔道です。能く能く気を付けよと、我々にも嚴重注意しているところです。

とにかく只管打坐と只管活動で練り上げるのみです。

「菩提薩埵。依般若波羅蜜多故。心無罣礙。」  
ぼだいさつた えはんにはやはらみたこ しんむけげ

菩提薩埵は般若波羅密多に依るが故に、心に罣礙無し。

菩提薩埵は又摩訶薩埵です。薩埵は菩提と同じで、菩提道心であり求道心又求道者のことです。確かに即今底を行じた故に隔てが取れた。「般若波羅密多に依るが故に」です。だから心に何の問題も起こらなくなった。と言うのが「心に罣礙無し」です。罣礙は妨げです。一点の障りも無くなり「只」に成ったと言うことです。

祖師方と凡夫の違いは、心身の隔てが有るか否かです。念を起こすか否かです。連続性が有るか否かであり、相手立てるか否か、「只」か否かです。つまり自己が有るか否か、徹したか否かです。何れも一つ事です。だから一つ事に成り切れれば全てが解決するのです。

「無罣礙故。無有恐怖。」

罣礙無きが故に、恐怖有ること無し。

將に言うに及ばずです。水を飲めば渴きが癒える。満たされれば何の憂いも不満も無いのです。それで満つることを涅槃といたうのです。坐禅ばかりに成った時が満です。自己が無くなった時です。坐禅がこれを証明してくれるので、坐禅に徹し切れれば良いのです。

「遠離一切。顛倒夢想。究竟涅槃。」

一切の顛倒夢想、究竟涅槃をも遠離す。

この句は、最初の「五蘊皆空と照見する時、一切の苦厄を度す。」に呼応していますが、是れは之です。是れで徹底したのです。

「顛倒夢想」とは、名相や語句や概念、思想などに囚われる悪い癖ですが、即今底が手に入ったから決定的に無くなった。涅槃は究極であり無上ですが、即今底は本来であり当たり前ですから涅槃とすべき者もないのです。当然顛倒夢想も究竟涅槃も綺麗に無くなった。本当の「只」に到り大悟徹底したのです。

道元禪師帰朝して曰く、「空手にして郷に帰る。一毫の仏法無し。唯眼横鼻直なることを認得す。朝々日東に出で夜々月西に沈む。鶏は五更に向かつて啼き、三年一閏に逢う」。

「只」に成って帰朝した。法もまた空じたので仏法らしきものは何も無い。ただ眼は横に連なり鼻は立てに成っている当たり前のことが得心できた。朝になると間違はなく日は東から出て、毎夜月は西に沈む。三年経つと閏年が訪れる。昔も今もこれからも、それがそれであり、是は此れである。

無門曰く、「大凡参禅学道は切に忌む。声に随い色を逐うことを。」参禅弃道する者は特に見聞覚知に囚われてはならぬ。心身を忘れてひたすら即今底に参徹せよ。「今」「只」せよということ。

即今底の意、作麼生。飯に逢えば飯を喫し、茶に逢えば茶に応ず。我が這裏、仏法なし。参。

「三世諸仏。依般若波羅密多故。得阿耨多羅三藐三菩提。」

三世の諸仏は般若波羅密多に依るが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得給えり。



三世の諸仏祖師方は、既に脱落して「只」に成った人。即ち成來の仏です。今行じている我々は將來の仏、つまり當來の仏です。得た人も、是れから得る人も「般若波羅密多に依るが故に」、つまり即今底に參徹して阿耨多羅三藐三菩提を得るのです。

經に曰く、「諸法は因縁より生ず、因縁より生ずるが故に去來無し。去來無きが故に処住無し。処住無きが故に畢竟空なり。是れを般若波羅密多と言う。」と。

是れ以上の真理も悟りも無いのです。遂に「阿耨多羅三藐三菩提を得た。」無上正等正覺に達した。悟りの垢も取れて大成したと言うことです。祖師の如く成るには、祖師の如く只管を鍊るのみです。只管の時、何れも仏の時節です。

仰山下ぎょうざんに妙信尼みょうしんあり。時に蜀より十七名の修行僧、明日仰山に問わんと欲して妙信尼の坊に

一宿す。その夜話、六祖風動幡動の話論ずるを聞きて、山主の妙信尼曰く、「十七頭の瞎驢めくらろほ惜しむべし。仏法未だ夢にだも見ざるあり。」と。是れを聞いた蜀僧、威儀を正して意を問う。尼曰く、「近前來。」もつと近くへ来いと。僧、近前す。尼曰く、「是れ風動に非ず。是れ幡動に非ず。是れ心動に非ず」と。この一声に時節純熟した十七の蜀僧、みな了悟して仰山に逢わず、辞して蜀に還る。みな阿耨多羅三藐三菩提を得給えり。般若波羅密多に依る。

遠方より來る道中、全てを忘れて「只」歩いてきたからに相違ないのです。只管歩行、有り難きかな。徳山に參ずるべく川向こうまで來た高亭こうていは、出迎えてくれた徳山の打ち振る扇子を見て大悟した。一切明瞭したから用が無いと、高亭はその俣行ってしまった。道中ひたすら歩行に成り切っていた結果です。

仏道は人々の脚跟きようこんか下なり。道に礙さえられ當處に明了。悟に礙られ當人円成す。何時も即今底なれば、何時何處で打發するか分からぬ。今は常に時節だからです。

「故知般若波羅密多。是大神呪。」

故に知る。般若波羅密多は是れ大神呪なり。

「故に知る」とは間違ひなく体得したと言うことです。般若波羅密多は是れこそ無上道であり、これ以上の願はないと自覚したのです。「神」は自由自在の働きを意味し、將に解脱の智慧は神通力であるぞと。

「呪」は祈祷とかまじないで、願いが叶うよう祈ることです。契當を意味し、心と身、思うことと行為とが一致した。つまり願ったことが叶うことを言うのです。これが「大神呪」です。

今や全て有りの俣が微塵の疑いもなく領ける。立つことも座することも、見ることも聞くことも、心のまま、自由自在となった。即ち身心脱落ほど尊いものは無い。今、是の大目的が叶ったのです。

ここを至道無難禪師は「言ウニ及バズ」と一括処理しました。今更何を寝言を言っておるのじや。眼は初めから眼ではないか。山は山。眼横鼻直ではないか。他に何が有るのじやと。徹底本

来からの決裁ですから手が付きません。はい、さようならと潔く退散、退散。

底意は、是の真実を知らねば活きた屍だぞ。そのためには即今底に徹せよ。それが「般若波羅密多」よ。解脱を得さえすれば宝の山を自由自在に出来るのだ。本当に徹して眼を醒ませと言っているのです。以下、本旨は皆同じです。

「**是大神呪。是大明呪。は無上呪。は無等等呪。**」

「是」は「これ」と言う指示代名詞です。阿耨多羅三藐三菩提（無上正等正覚）を指しています。つまり脱落のことです。

僧百丈に問う。「如何なるか奇特の事」。

丈曰く、「独坐大雄峰」。

僧礼拝す。

丈即ち打つ。

これ碧巖録第二十六則の話です。いささか力を持った僧が百丈禪師に問うた。百丈を試そうという意図です。こうした問いを検主問と言います。

老師、一つお聞きして見るんですが、世の中で一番の摩訶不思議なこととは一体何ですか？ と知り切っていてとぼけて聞いたのです。怪力神通などを奇特とは言わないのです。因果を無視したものは真理ではないからです。

では奇特とは何か？ 法を自在にすることです。「只」の働きです。

百丈曰く、独坐大雄峰と。只、どくざだいゆうほう、の一声あるのみです。その他何者もないのです。

俺が此処で坐禅することだ、と言う文字面ですが、百丈禪師にはそのような意図的なものは無いのです。ただ、口からそう発せられたまです。洞山の「麻三斤」、趙州の「無」又「庭前の柏樹子」、雲門の「乾屎瀘―糞搔きへら」等等みな然り。釈尊の拈華・迦葉尊者の微笑も同じです。ここがはっきりしたので願いが叶ったのです。

この僧、「只」聞いて何とも思わず「只」礼拝した。見上げたものです。此の僧、一隻眼を具していたので、自己も百丈も無い。綺麗な者です。

百丈は何んとも言わず、「只」ぴしやりと打った。是、不是を超越して何者も無い。空と空の出会いは是の如し。何も無いから縁次第で何にでもなる。この「只」の働きを奇特の事と言うのです。これが法です。

今この奇特の事が明らかになった。即ち一切の苦厄を度し終わった、体達したと宣言した歓喜の一声が「無上呪」「大神呪」「大明呪」「無等等呪」です。

これも無難禪師は「言ウニ及バズ」と。陽は東から昇り、西に沈む。そんな当たり前の事を今更気が付いて「大神呪」「大明呪」「無等等呪」などと騒ぎ立てるな。そんな事に感心している場合か。珍しいことでも有り難いことでもないぞ。今更恥ずかしいから口にするなど。とても大きな慈悲です。大慧が碧巖の版を焼き捨てたにも似たるかな。

白隠禪師は、「脚根下又ソモサン。我が為ニ最下底ヲ拈ジモチキタレ」と。般若を無上じやと讃歎して言われるが、般若に上下があるのか？ 上ばかり向いては般若が泣きますぞ。と横槍を入れて後世の我々に即今底こそ「大神呪」「大明呪」じゃないか。般若ではないか。他を探してはならぬと自覚を促して、更に大上段より、「是の俺は無上般若は要らぬ。その替わり最

下底の般若を、即刻出して見せよ」との厳命です。言葉や文字に就いて廻っては般若が汚れるので即今「大神呪」「大明呪」などの飾り物を打ち消して「只」たらしめ、法の円満を計ったのです。

さあ、白隠禪師にどう答えるか？

「只」に無上も第二、第三もない。最高も最低もないのです。いちいち宇宙大です。これ無上にして最高に非ずや。「只」に成れ、「只」に成れ。

無等とは比べる物無し、等しき物無しです。独立独歩、天上天下唯我独尊です。何一つとして同じ物はなく全て無等です。「今」じゃ、「今」じゃ。これもそれも「只」を讃歎した語です。

皆、観自在菩薩と互角にて小気味よし。因みに白隠禪師の師は正受老人、正受老人の師匠が至道無難禪師です。

「能除一切苦」。

能く一切の苦を除く。

是れも冒頭あたりの「一切の苦厄を度す。」に呼応した論法で、到り得たことです。そもそも過去心不可得、現在心不可得、未来心不可得です。除くべき苦など、何処にも無いことが本当に分かったと言うことです。成り切って自己の無いことです。次も同じ事です。

「真実不虛」。

真実にして虚ならず。

真実とは不純物の無い、純粹にしてありのままです。即今底です。食べるは食べる。歩くは歩く。坐禅は坐禅です。水は水にして火に非ず。虚であるはずがないのです。

だから既に充分です。「妄想を除かず、真を求めず」。「別に聖解無し、ただ見を息むべし。」とあります。取り除く物も無く、求める物も無い。能く氣を付けねばならないところです。即今底に徹底して自己無き消息を体得すれば、初めから真実にして虚ではないことが明瞭するのです。参。

「故説般若波羅密多呪。即説呪曰」

故に般若波羅密多の呪を説く。即ち呪を説いて曰く。

既にそれがそれだ。飯は飯、汁は汁です。堂々と手に入れたので、堂々と飯も汁も食べた。是れが般若波羅密多であり真実であり、どうしても即今底であると言き着いた。もう終着点です。今や為すべき事も得る物も絶え、知るべき事もなく、これ以上説くことも伝えることも無いのです。全て尽くし切って、確固たる大法を確かに体得して仏道は成就したのです。

その事を簡潔な呪文に纏めた。「故に般若波羅密多の呪を説く」です。

「即ち呪を説いて曰く。」説いて聞かせるから、是の呪を能く咀嚼そしゃくしてみよ。仏の言うことには一つの無駄もないぞと。

「羯諦羯諦。波羅羯諦。波羅僧羯諦。」

鳩摩羅什も玄奘三蔵も漢訳しなかった語句です。ここは端的にこのままが一番良いのです。カアー、カアーはカアー、カアー。ワンワンはワンワンが真実であるように、ギヤーテーギヤ

ーデー。ハーラーギヤーデー。ハラソーギヤーデー。このありのままが摩訶般若波羅蜜多です。この事がはっきりしたか、否かです。つまり即今底が本当に手に入ったかどうかです。

梵語の「ギヤーデー」は、去と度の二義があり、概念としては過去に属する言葉とか。既に結果だと言うことです。遂に成し遂げて決着した。度し終わった。解脱した。「只」に成った、と言うことです。

我れと有情非情と同時成道、山川草木悉皆成仏と叫ばれた釈尊。言葉を換えれば、天地と同根万物と一体であった。自他が無くなり、全てが大円成した。

「ハーラーギヤーデー」。波羅とは波羅密多で、ぶち抜いた。成し得た。本来を得た。本当の今に目覚めたという意です。事実です。

「ハラソーギヤーデー」。のソーは、普く、みんなです。皆共に真理を悟った。全て解脱した。

このように余りに多義を有し深さをもった言葉故に、呪文として扱ったのです。到り得た涅槃寂定・解脱の世界は言葉では言い表せないし、又理解できないので、三蔵はそのことを正しく伝えるが為にとった策です。求道の途と、到り得た結果とを明確にした素晴らしい方法です。次はいよいよ最後です。

### 「菩提薩婆訶。般若心経。」

菩提は道、真理です。薩婆訶は、速やかにと成就と直入の三義を含み、忽ち普遍の真理に達した、という意味です。即今底即涅槃であった。今その事がはっきりした。身心脱落したと言うことです。「即心是仏」と言うも同じです。般若心経はその事を説いてあり、且つそれを体得する道を示しているのです。

この羯諦、羯諦、波羅羯諦、波羅僧羯諦、菩提薩婆訶を総じて訳せば、

「とうとうぶち抜いた。(悟った)。痛快にやった。確かに解脱して皆共に真理に達した。かくして仏の道は成就した。目出度し、目出度し。将に万々歳だ。」

釈尊の真意は全ての人を解脱させることです。八万四千の法門全てがそうです。そして全ての祖師方がそうであり、全ての經典・祖録がそうです。要約すれば、般若波羅密多(即今底)を徹底行じなさいということに尽きるのです。

道元禪師曰く、「人々分上豊に具われりと雖も、修せざるには現れず、証せざるには得ることなし。」と。結果は行じて後の様子です。参。

辨道話に曰く、「諸仏如来、ともに妙法を単伝して阿耨菩提(無上道)を証するに、最上無爲の妙術あり。これただほとけ仏にさずけて、よこしまなることなきは、すなはち自受用三昧その標準なり。この三昧に遊化するに端坐参禅を正門とせり。」と。

坐禅は只管打坐が標準です。思慮分別の入る余地なく、見聞覚知の六塵、六境が入る隙間の無い打坐です。ファイと折々出て来る念は、そのまま只管打坐に吸収されて禍にはなりません。ともかくにも心身を忘れて、昼夜を問わず坐禅を専らにすることです。又、四六時中、為すべき事を単一にするのです。掃除の時は掃除に徹して、掃除無き掃除をすることです。只管掃除、只管活動です。身心一如。無爲端的の法門は斯くして仏祖より単伝するのです。見よ、眼横鼻直を。誰か眼横鼻直ならざる。参。

## 茶話会

**老 師**・・ 先般は心境の進んだ古参ばかりでしたから、みんな本当に能く只管を鍊っていました。しかし徹し切る時節を目前にして下山しなければならぬのが残念です。こうして仏が生まれる時節を前にして障道の因縁が現れる。世の常ですが誠に残念なことです。徒に時間が掛かるのはその為です。

初めはどうしても禅のこと、法のこと、悟りや見性のことが気になり、それを知りたくて仕方がないものです。こうした願望を追及しますと、知らずして語句を漁り、法我見の魔道に落ちてしまいます。心境は進まないが理屈だけは分かってくると言う厄介な時です。

ところが何も分からないままに、とにかく坐禅をします。とにかく呼吸に専念することです。見失っても見失っても坐禅に還ることです。呼吸に還ることです。この努力を怠らねば早晚これが坐禅、是れが呼吸だと、念の無い事実には気が付きません。

この念の無い事実を徹底護るのです。是れが只管功夫です。その他のことは何もしてはいけません。やがて散漫も治まり、心身が次第に親しくなり楽になっていくのです。それは修行の功德であり光明です。

道場から帰ったばかりのお二人に、修行の様子を聞かせて貰いましょうか。

**参禅者 A**・・ 未だチラチラ念が出没します。けれども確かに言えることは、念が出る一瞬が分かる様になったこと。このことは修行者として一つの明解な区切りじゃないかと思えます。歩いている時もパツと出ますが、その不自然な様子がとても能く分かるので、直ぐ今の事実に戻っています。

このように明確な修行が出来るようになりましたので、どのように修行すればと言った疑問がすっかり無くなり、単調になったと言うかとても楽になりました。

**老 師**・・ それだけの光明を得たのですから、益々深く、油断無く行じ尽くすことです。

**参禅者 A**・・ しつこく御聞きするんですが、歩く時は呼吸も関係なく「只」歩行ですね。

**老 師**・・ そうです。歩く時は「只」歩くが法であり真実です。他に何か付随していたら人づれの修行となり、徹し切れませんから能く注意して下さい。とにかく成り切るためには単一になってそのもの自体にのめり込まなければいけないということです。これが成り切るための原則です。一心不乱に「只」するのです。一つになるとは徹することです。

**参禅者 A**・・ 成り切りやすいようにするには、単一化して一心不乱に「只」することですね。

**老 師**・・ その通りです。

**参禅者 A**・・ そうしましたら百人の「今」があり、百人の修行方法があつて当然だし、それに貫かれておる原則は「只」することで良いのですね。その方法は人々勝手次第ということで、歩くのも速い人もおれば遅い人もおる。遅速や内容に関係無く、その事のみを陶醉して余念のない事が主眼ですね。

**老 師**・・ 全くその通りです。徹した時が見性です。

**参禅者 A**・・ 深く信じることによって宗教間での争いが起きるのは、根元的な違いが有るからですか。例えば自己を越えるための「只」の努力ではなく、想像し画かれた世界を信じて求めるとか。

**老 師**・・ そうです。神や仏を信じることは大切なことです。患悩の心、邪悪な心を見透かす存在だからです。崇りや裏切りへの怖さが心の暴走を鎮めてくれるのです。しかし、自己から

起こる固執した特定な絶対観は、根本が自我です。過去世の業障を引きづり三毒に侵されています。その危険に気付かない信仰は怖いことが起こる要素なのです。

信ずる自己自信が常に問題であり、諸悪は自己の内に有ると気付かせるのが本当の宗教です。それだけでは不十分で、きちつとした具体的な解決策をもった宗教こそ、人類に必要な道であり法です。絶対信仰の自己は他否定の心を携えていることが多く、そうした人は対立を免れることは難しいのです。しかも深い所に究めて残酷な精神が発生する心のメカニズムがあるのです。

信仰を裏切ったとして、神が平然と人を焼き殺すはありませぬ。是れが権力と結びつくと、人間として最も卑劣な行為が公然と行われてしまうのです。戦争より非道です。是れが邪教です。歴史を見れば分かることで、充分に気を付けなければなりません。

仏道修行は信ずるのではなく、この心身を捨てて純一に行ずることが主眼であり全てです。このことを深く理解できれば修行に迷うことはないのです。何故なら、他を見ず、「今」「只」真剣に行じておれば良い、と言う信念が具わるからです。

参禅者A・・・ということは、間違いを起こす根本要素は心身の「隔たり」によって起こる自己ですね。成り切って自己を忘じ切った時、「隔たり」が無くなり身心一如となったその時、この心身に纏わり付いていた過去世の癖が無くなり、真実がはっきりして真に自由になると理解して宜しいですか。

老 師・・・その通りです。

参禅者A・・・自己を根本にした信仰や信念は固執であるから危険なのだと言う事が能く分かりました。信を起こす自己そのものを捨てる。その為の坐禅修行なのだと言う事ははっきりしました。有り難うございました。

老 師・・・仏道修行は自己を捨て尽くす努力です。ですから心の癖が取れて、結果として解脱するのです。成り切るとはそういう絶大な世界に目覚める道です。

(小森さんは禅定に入り、只管そのものになっていた。他の一切が無くなった状態であった。老師が足早に小森さんのそばへ行き、「喝！」と大喝する。その後、小森さんはゆっくりと、手を静かに挙げ、左に右に動かすのみ)

老 師・・・今の彼の様子が明々白々に分かる人。言ってご覧なさい。どうじゃ！

参禅者A・・・今の彼の行動が全てで何も無い、只それだけです。

老 師・・・よろしい。「只」そうしているだけです。見た通りで、言う必要が無い。それがそのままだから説明の余地がない。ここが修行の要です。日々このように念の無い一点を見失わないように努力してください。

参禅者B・・・今の方の心境なんですけども、明日も明後日も続くものなんでしょうか。

老 師・・・「今」は続くんですか、どうですか？

参禅者B・・・「今」は「今」ですが、「今」は既に在りませぬ。

老 師・・・その通り。その心境がずっと継続するかどうかという問ですが、固定した心など無いことは分かっているでしょう。

参禅者B・・・はい。

老 師・・・しかし自分にとって都合が良い、気持ちが良い場合、それがずっと続くことを願ったり求めたりするものです。これが自我・我見であり、拘りであり妄想・妄念・妄覚です。要するに囚われです。この有り得ない事を願う癖を解決するのが仏道修行です。「今」だけに成ることです。しかし徹しない限りこの癖は決して落ちませんから、弁道功夫をゆるがせに出来ない

のです。

**参禅者B**・・・ 能く分かりました。要するに即念を徹底守り切ること。思惑や想念の余地のない「今」を鍊るのが禅修行ですね。

**老師**・・・ その通りです。余念を入れぬよう縁に成り切る努力です。是れが只管功夫です。「今」「只」です。

**参禅者B**・・・ 全て縁だから何事も「今」「只」淡々とするのが只管功夫であることが本当に能く分かりました。

**老師**・・・ 良かったですね。只管とは縁自体ですよ。そのもの自体は是も非もなく、過不足が全くありませんから何時もちょうど好いのです。是れを極楽といふのです。

ここに極楽の話が出ましたので、少し蛇足します。普通は極楽を理想郷として空想します。忍耐も苦痛も努力も必要無く、望んだことは何でも叶えられるような世界として。

若し有つたら地獄です。確固たる因果が無い為、大混乱が起こります。大混乱は別として、退屈し空虚だし忽ち飽きてしまいます。

何故なら何時も満腹では何も食べられんでしょう。お腹は空かなければいけないのです。何でも叶えられたら自分の希望や技術など、持つておる能力や理想を發揮し試すことができないのです。味わえないのです。だから自分の存在意義が何処にも無いのです。

試したり發揮するためにはそれだけの条件が必要です。不可能を可能にするから愉快なのです。その為の研究努力は希望であり理想です。何事が起こるか分からないから注意もいるし、忍耐も妥協も諦めも苦しみも存在する環境が必要なのです。そうした条件があるからこそ満たされる要素が整っているのです。まさしくこの世界しかないのです。此処に於いて縁に成り切つて自己の無いことが、これこそ本当の極楽世界なのです。

したがって極楽は彼の岸に有るのじゃない。自分自身、「今」是の様子なのです。理想郷などを妄想・妄念・妄覚した途端に即今底を見失つて地獄になるのですが、安住すれば即極楽です。地獄も極楽も自分の心境次第と言うことです。その事が分からぬだけです。六道は地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上ですが、天上界が迷いなのは、良いことばかりの空想世界だからです。天上界を悟りと勘違いしないようにして下さい。

現在の環境は子供にとつて究めて不幸です。物に於いては殆ど叶えられているため、忍耐も努力も我慢も育たないのです。自分で幸せになるための力を養う条件が無いと言うことです。

努力できる自分。創意工夫し、真似て失敗してそこから学ぶ。その達成感是他からは得られないものではないのです。つまり、真剣な自分。耐えている自分。汗しておる自分。それを味わえるのは自分自身です。何時でも何処でも自分です。是の事を親がして見せて、やらせてみて、如何なる境遇であろうとも最善を尽くす精神を培うことです。是の環境条件が有つて人らしく育つのです。

是れが人として生きる正しい信条ですから、宗教者は勿論、教育者も親も、社会全体、未来を担う子供達にはもつと根本的なところに注意を払つて欲しいものです。

**参禅者B**・・・ 今までその様な説法を聞いたことがありませんでした。着眼がはっきりしたので一層良く分かりました。「今」「只」することは今に安住することであり、即今底そのものが極楽であることが能く分かりました。

**老師**・・・ 縁に任せて心を動かさない。是れが徹するです。これだけです。是れが「只」です。「只」が極楽です。

参禅者C・・・ 能く分かりました。

老 師・・・ 徹しない限り臍落ちしません。徹底すると何故納得するかというと、分からないという自分が無くなるからです。つまり擬議や不審の念が無くなるから自然に安住するのです。

参禅者C・・・ やはりそうですか。何故かと考えることも妄想・妄念、つまり拘る自分が有るからですね。

老 師・・・ まさにそうです。何故か、という精神行為は全ての疑問と思考の源泉なのです。ですから心意識や念想観の運転を停めないで、想念し続ける心の癖は取れないのです。

参禅者C・・・ 早く心の癖を落とすには、どんな疑問が出ても無視して「今」「只」の努力ですね。

老 師・・・ その通りです。仏であれ親であれ、出て来る者は全て妄想ですから、それを捨てる努力こそ仏道修行です。要点は一つに成り切ることで、他の全てを捨て切ることです。捨て切ることが徹することです。つまり自分を忘れることです。

参禅者C・・・ 分かりました。有難うございました。

参禅者D・・・ 食べるときに心得を教えてください。

老 師・・・ 余念無く一心に「只」食べることで、畜生のようにお腹かへ入れる作業ではなく、本当に一噛みを真剣にすることです。これを成り切ると言うのです。

修行の主眼は身と心一つにして菩提を究尽することです。一心に「只」することです。そのためには、噛みながら箸を無闇に動かさないことです。噛む時は噛むだけです。他の一切の行為を停止する事です。要するに単純化することです。この努力によって無意識に作動する動物的本能行為を改革するのです。精神構造を根元的に変革する事なのです。

そのポイントが一瞬であり「只」にあるのです。動物的食事を改め、注意深く一心に「只」食べることです。端的に言えば、食事一つがまともに出来なければ、禅を語る資格はないのです。

参禅者D・・・ つまり食事のみならず全てにわたって注意深く「只」すれば良いと言うことですか。

老 師・・・ その通りです。全てと思わずたった「今」だけです。本来全て道だから愚直に努力しておれば自然に開けていくのです。心は一つですから、何でも一心にして居れば行き着くのです。

参禅者D・・・ 言われるとおりに、真剣にやればいいと言う事ですね。

老 師・・・ そうです。信じて素直に行ずるしかないのです。非常に専制的な言い方ですが、実際にそれしかないのです。

医師でもスポーツでもそうですね。学ぶためには信ずる先生に従って、言われるままに努力して習得するしかないでしょう。己を捨てて学ぶしかないし、本当にやろうと思ったら本当に教えてくれる人に付かなきゃいけないのです。本当に体得させようと思っただらぐずぐず言わずに、「これをやれ！」と言うだけです。そのことをひたすら実行するしかないのです。だから道に厳しい人ほど良いのです。

参禅者D・・・ そこにおいて馬鹿になると言うことですか。

老 師・・・ そうです。はじめから己を捨てていますから、癖を捨てるには好都合なのです。馬鹿になって素直の極を行けばいいのです。自分があるとそれが対立して決して馬鹿になり切れません。「只」すればいいのですから、思いようではこのくらい楽で有りがたい事はないのです。心に何も無い、大馬鹿が実は本当の聖人なのです。虚偽の無い無心が聖人です。



参禅者D・・・「今」「只」になることは大馬鹿になること。それが聖人ですか。

老師・・・そうです。

参禅者D・・・くだいようですが、結局、今、現実この瞬間しかない。この真相を体得するための修行が即今底であり、本当に徹した時、解脱した時ですね。大馬鹿に成った時ですね。

老師・・・その通りです。徹した時、徹した証が有るのです。体得した自覚です。是れが仏法の命です。

しかし「今」や「只」が在ったら本当に徹せられないので解脱出来ませんよ。だから「只」を軽く取る人は軽い法しか得られないので気を付けて下さい。「今」が全てですから。どうあっても「今」が始まりであり「今」が終わりです。要するに始まりも終わりもない「今」が「只」です。ここに体達した時が涅槃寂定であり成仏と言うのです。

本当に「今」に徹し「只」に成った消息が大事なのです。決定的な大自覚が起こらねば決着しないのです。とにかく大馬鹿になり徹することです。

参禅者D・・・子供の時はそうやってたような気がしますが。

老師・・・そうです。無心に遊ぶ子供の時はそうだったのです。行き当たりばったり、何もかも忘れて無我夢中です。それでいて満足なのです。此処が大切な急所です。これが無分別智です。

しかしながら彼らが悟れないのは、それがそれだと確信を持つ自覚作用が起こるまで徹していないからです。その場限りの遊びで終わり、想念の世界に立ち所に戻るから、徹する時節が訪れないのです。

一回本当に徹して冷煖自知しない限り、囚われであることを知ることが出来ないため、癖を打破することもまた出来ません。猿は矢張り水中の月を取ろうとして命を捨てるのです。それが猿なのです。

自分を本当に知ること空する事もできるのは、この心が有るが故です。心が有る故に迷い、心あるが故に悟りが可能なのです。したがって菩薩になるにも、仏になるにも、とにかく心を授からない限り不可能なのです。逆も又真なりで、心が有る限り努力次第で誰でも悟れると言う事です。眼耳鼻舌身意の「意」が、色声香味触法の「法」となる理由が能く分かったでしょう。

世話人・・・では、時間が参りました。良い参師問法でした。有難うございました。

平成二十三年二月二十一日

七十一納

希道 識